

# 陽炎座

泉鏡花

青空文庫



「ここだ、この音なんだよ。」

帽子あたまも靴も艶てらてら々と光る、三十ばかりの、しかるべき会社か銀行

で当時若手の利きけものといった風采ふうそう。一ツ、容ようす子は似つかわし

く外国語で行こう、ヤングゼントルマンというのが、その同つれ伴の、

——すらりとして派手に鮮あざやか麗な中に、扱しごき帯の結んだ端、羽織の

裏つま、褻つまはずれ、目立たないで、ちらちらと春風にちらめく処ところど

々ころに薄うつつりと蔭がさす、何か、もの思おもいか、悩なやみが身にありそうな、

ぱつと咲いて浅かさなく重はなびらる花片くもりに、曇のある趣に似たが、風情は勝

る、花の香はその隈くまから、幽かすかに、行違ゆきちがう人を誘かうて時かめく。薫かおりを籠こめて、藤、菖蒲あやめ、色の調こう一枚小袖こそで、長襦袢ながじゆばん。そのいづれも彩いろいと糸は使いわないで、ひとえに浅みどりの柳の葉を、針で運んで縫ぬったように、姿を通して涼しさの靡なびくと同時に、袖にも棲すにもすらすらと寂さしの添よった、瘦やせぎすな美しい女むとに、——今のを、ト言掛いけると、婦人おんなは黙もつて領うなずいた。

が、もう打領うく咽喉のどの影かげが、半襟はんせきの縫ぬいの薄紅梅うすこうばいに白く映うつる。

……

あれ見よ。この美しい女むとは、その膚はだえ、その簪かんざし、その指環ゆびわの玉も、とする端々透すきとお通とおつて色いろに出る、心の影かげがほのめくらしい。

「ここだ、この音ねなんだよ。」

おんな  
 婦人は同伴つれの男にそう言われて、時に頷いたが、傍かたわらでこれを見た松崎と云う、緋かすりの羽織で、鳥打を被かぶつた男も、共に心に頷いたのである。

「成程これだろう。」

但し、松崎は、男女なんによ、その二人の道ずれでも何でもない。当日ただ一人で、亀井戸かめいどへ詣もうでた帰途かえりであつた。

すまい  
 住居は本郷。

こうとうぼし  
 江東橋から電車に乗ろうと、水のぬるんだ、草萌くさもえの川通りを陽炎かげろうに纏もつれて来て、長崎橋を入江町かかに掛かかる頃から、どこともなく、遠くで鳴物の音が聞えはじめた。

松崎は、橋の上に、欄干らんだんに凭もたれて、しばらくたたずいで聞入つたほ

どである。

ちやんちきちき面白そうに囃すかと思つと、急に修羅太鼓を摺すりりがねましねまし

鉦交り、どどんじやじやんと鳴らす。亀井戸寄りの町まちなか中で、

屋台に山形の段々染だんだらぞめころずきん、鍛頭巾で、いろはを揃えた、義士が打入

りの石版絵を張廻わして、よぼよぼの飴屋あめやの爺様じさまが、皺しわくたのま

くり手で、人寄せにその鉦太鼓かねを敲たたいていたのを、ちつと前さきに見

た身にも、珍らしく響いて、気をそそられ、胸が騒ぐ、ぱったり

また激しいのが静まると、ツンツンテンレン、ツンツンテンレン、

悠々とした糸が聞えて、……本所駅ほんじょへ、がたくた引込ひっこむ、石炭を

積くんだ大八車の通るのさえ、馬士まごは銜煙管くわえぎせるで、しやんしやんと

轡くつわが揺れそうな合方となる。

絶えず続いて、音色ねいろは替つても、囃子はやしは留まらず、行交ゆきかう船脚  
 は水に流れ、蜘蛛手くもてに、角つのぐむ蘆あしの根を潜くぐつて、消えるかとすれ  
 ば、ふわふわと浮く。浮けば蝶の羽はの上になり下になり、陽炎かげろう  
 に乗つて揺れながら近づいて、日ひ当あたりの橋の暖い袂たもとにまつわつて、  
 ちやんちき、などと浮かれながら、人の背中を、トンと一つ軽く  
 叩いて、すいと退のいて、

——おいで、おいで——

と招いていそうで。

手に取れそうな近い音。

はつ、とその手を出すほどの心になると、橋むこうの、屋根を、  
 ひよいひよいと手踊り雀、電信柱に下向きの傾かたがり燕、一羽気まぐ

れに浮いた鴟かもめが、どこかの手飼いの鶯うぐいす交りに、音を捕とらうる人ひと心こころを、はツと同音に笑いでもする氣勢けはい。

春たけて、日遅く、本所は塵ちりの上に、水に浮うかんだ島かとばかり、都を離はなれて静しずかであつた。

屋根の埃ほこりも紫雲英げんげの紅くれない、朧おぼろのような汽車が過よぎる。

その響きにも消えなかつた。

## 二

松崎は、——汽車の轟とどろきの下にも埋れず、何等か妨げ遮るもの  
があれば、音となく響きとなく、翻ひらり然と軽く体を躲かわす、形のな



い、思いのままに勝手な音の湧出する、空を舞繞る鼓に翼あるものらしい、その打囃す鳴物が、——向つて、斜違の角を広々と黒塀で取廻わした片隅に、低い樹立の松を洩れて、朱塗の堂の屋根が見える、稲荷様と聞いた、境内に、何か催しがある……その音であろうと思つた。

けれども、欄干に乗出して、も一つ橋越しに透かして見ると、門は寝静つたように鎖してあつた。

いつの間にか、トチトチトン、のんきらしい響に乗つて、駅と書いた本所停車場の建札も、駅と読んで、白日、菜の花を視むる心地。真赤な達磨が逆斛斗を打つた、忙がしい世の麵麩屋の看板さえ、遠い鎮守の鳥居めく、田圃道でも通る思いで、江東

橋の停留所に着く。

空いた電車が五台ばかり、燕が行抜けそうにがらんとしていた。乗るわ、降りるわ、混合う人数の崩るるとき火水の戦場往來の兵には、余り透いて、相撲最中の回向院が野原にでもなつたような電車の体に、いささか拍子抜けの形で、お望み次第のどれにしようかと、大分歩行き廻つた草臥も交つて、松崎はトボンと立つ。

例の音は地の底から、草の蒸さるるごとく、色に出で萌えて留まらぬ。

「狸囃子と云うんだよ、昔から本所の名物さ。」

「あら、嘘ばっかり。」

ちようどそこに、美しい女ひとと、その若紳士が居合わせて、こうことば言を交わしたのを松崎は聞取った。

さては空音そらねではないらしい。

若紳士が言ったのは、例の、おいてけ堀、片葉あしの蘆、足洗い屋敷、埋蔵うめぐらの溝どぶ、小豆婆あずきばば、送り提燈ぢようちんとともに、土地の七不思議に数えられた、幻の音曲である。

言った方も戯たわむれに、聞く女ひとも串戯じようだんらしく打消したが、松崎は、かえつて、うっかりしていた伝説いいたえを、夢のように思出した。

興ある事かな。

日は永し。

今宮辺の堂宮の絵馬を見て暮したという、隙ひまな医師いしやと一般、仕

事に悩んで持余もてあました身体からだなり、電車はいつでも乗れる。

となると、家へ帰るにはまだ早い。……どうやら、橋の上で聞

いたよりは、ここへ来ると、同じの無い中うちにも、囃子の音が、

間近に、判然はつきりしたらしく思われる。一つは、その声の響くのは、

自分ばかりでない事を確めたせいであろう。

その上、世を避けた仙人が碁ごを打つ響きでもなく、薄すすきがく隠かくれ

の女郎花おみなえしに露おとすの音信おとするる声でもない……音色ねいろこそ違ちがうが、見世みせ

ものの囃子と同じく、気をそそって人を寄せる、鳴ものらしく思

うから、傾く耳の誘うしろわるる、寂しい横町へ電車を離れた。

向ひなたつて日南うしろの、背後は水で、思いがけず一本の菖蒲あやめが町に咲い

た、と見た。……その美しい女ひとの影は、分れた背中にひやひやと

染む。<sup>し</sup> ……

と、チャンチキ、チャンチキ、嘲けるがごとくに囃す。<sup>あざ</sup> ……

がらがらと鳴つて、電車が出る。突如として、どどん、じゃん、じゃん。——ぶらぶら歩行き出すと、ツンツンテンレン、ツンツンテンレン。

三

片側はどす黒い、水の淀んだ川に添い、がたがたと物置が並んで、米俵やら、筵<sup>むしろ</sup>やら、炭やら、薪<sup>まき</sup>やら、その中を蛇が這<sup>は</sup>うように、ちよろちよると鼠が縫い行く。

あの鼠が太鼓をたたいて、鼈いたちが笛を吹くのかと思つた。……人  
通まるてり全然なし。

片側は、右のその物置に、ただ戸障子を繫つなぎあ合あわせた小家こいえ続つき。  
で、一二軒、八百屋、駄菓子屋の店は見えたが、鴉からすも居おらなけれ  
ば犬も居らぬ。繩なわのれん暖簾も居酒屋めく米屋の店に、コトンと音を  
させて鶏が一羽ある歩行あるしていたが、通りかかつた松崎を見ると、高  
らかに一声鳴いた。

太陽ひはたけなわに白い。

颯さつと、のんびりした雲から落おちかかつて、目に真蒼まつさおに映つた、  
物置の中の竹屋の竹さえ、茂つた山吹の葉に見えた。

町はそこから曲る。

と追分で路みちが替つて、木曾街道へ差掛さしかかる……左右戸毎まていえなみのきあの軒のきあ行燈いんどん。

ここにも、そこにも、ふらふらと、春の日を中うちへ取つて、白くひともしも点ひともしたらしく、真昼浮出もうて朦もうと明るい。いずれも御泊り木賃宿きちんやどで、どの家も、軒より、屋根より、これが身しんしやう上しんしやう、その昼行燈ばかりが目に着く。中うちには、廂ひさし先さきへ高々と燈籠とうろうのごとくに釣つた、白看板の首を擡もたげて、屋台骨は地つちの上に獸けもののごとくつたのさえある。

吉野、高橋、清川、榎葉まきは。寝物語や、美濃みの、近江おうみ。ここにあわれを留とどめたのは屋号にされた遊女おいらん達。……ちよつと柳ひともとが一ひともと本あれば滅びた白昼くるわの廓ひとに齊ひとしい。が、夜寒よさむの代しろに焼尽して、塚の

しるしの小松もあらず……荒寥こうりようとして砂に人なき光景ありさまは、

祭礼まつりの夜よに地震して、土の下に埋れた町の、壁の肉も、柱の血も、そのまま一落の白髑髏しやれこうべと化し果てたる趣あり。

絶壁の躑躅つづじと見たは、崩れた壁に、ずたずたの襠褌おむつのみ、猿ざるひ曳きが猿に着せるのであろう。

生命いのちの搦からむ棧橋かけはしから、危あやうく傾いた二階の廊下に、日も見ず、背後うしろむきに鼠ねのこの布子の背せなを曲げた首の色の蒼あおい男を、フト一人見附けたが、軒に掛けた蜘蛛くもの囿いの、ブトリと膨れた蜘蛛の腹より、人間は瘦やせていた。

ここに照る月、輝く日は、元はげた金銀の雲に乗った、土御門家つちみかどけ一流易道いちりゅういどう、と真赤まっかに目立った看板の路地から糶出せりだした、そればか



り。

空を見るさえ覗くのぞよう、軒行燈の白いにつけ、両側の屋根は薄暗い。

この春の日向ひなたの道さえ、寂さびれた町の形さえ、行燈に似て、しかもその白あかりけた明に映る……

表に、御泊りとかいた字の、その影法師のように、町幅まっの真ただ中とも思う処に、曳ひきす棄てたらしい荷車が一台、屋台を乗せてガタリとある。

近ちかづいて見ると、いや、荷の蔭に人が居た。

男か、女か。

と、見たてい体は、褪あせた尻しりきり切の茶の筒つつ袖ぽを着て、袖を合わせ

て、手を拱こまぬき、紺きやはんばきの脚絆穿わらじがけ、草鞋掛てぬぐいの細い脚を、車の裏へ、踏ふみそろ揃そろえて、衝つと伸ばした、抜衣紋ぬきえもんに手拭てぬぐいを巻いたので、襟も隠れて見分けは附かぬ。編笠、ひたりと折合わせて、紐ひもを深く被かぶつたなりで、がつくりと俯向うつむいたは、どうやら坐眠いねむりをしていそう。

城の縄張りをした体ていに、車の轆えの中へ、きちんと入つて、腰は床しょうぎ几ぎに落したのである。

飴屋あめやか、豆屋か、団子だんごを売るか、いずれにも荷が勝つた……おでんを売るには乾いている、その看板がおもしろい。……

屋台の正面を横に見せた、両方の柱を白木綿で巻立てたは寂しいが、左右へ渡して紅金巾べにがなきんをひらりと釣った、下に横長な掛かけあ行燈いんどん。

- 一 …………… 坂東よせ鍋なべ
- 一 …………… 尾上天麩羅おのえてんぷら
- 一 …………… 大谷おそば
- 一 …………… 市川玉子焼
- 一 …………… 片岡 椀盛わんもり
- 一 …………… 嵐 お萩
- 一 …………… 坂東あべ川

一 ……………市村しる粉

一 ……………沢村さしみ

一 ……………中村 洋食

初日出揃い役者役人車輪に相勤め申候

名の上へ、藤の花を末濃すそこの紫。口上あと余白の処に、赤い福面

女めに、黄色な瓢箪男ひよつとこ、蒼い般若あおはんの可恐こわい面。黒の松茸まつたけ、浅

黄はまぐりの蛤、ちよつと蝶々もあしらつて、霞を薄くぼかしてある。

引寄せられて慕つて来た、囃子の音には、これだけ気の合つたものは無い。が、松崎は読返してみても苦笑いした。

坂東あべ川、市村しるこ、渠かれはあまい名を春狐しゅんこと号して、福

面女に、瓢箪男、般若の面、……二十五座の座付きで駈出かけだしの狂

言方であつたから。――

「串じょうだん 戯じやないぜ。」

思わず、声を出して独ひとりごと言。

「親仁おとつさん、おう、親仁さん。」

なぞのもので、ここに木賃の国、行燈の町に、壁を抜出た楽が  
きのごとく、陽炎あらかわに頭あたまれて、我を諷ふうするがごとき浅黄あさぎの頭巾ずきんは？

……

屋台の様子ことどもが、小児あいてを対手で、新粉細工りようけんを売るらしい。片岡牛  
鍋、尾上天麩羅、そこへ並べさせてみよう了りようけん簡。

「おい、お爺じいい。」

と閑ひまなあまりの言葉がたき。わざと中ちゆうツ腹うづらに呼んでみたが、寂じやく

寞またる事、くろんぼ同然。

で、操あやつりの糸の切れたがごとく、手足を突張つっぱりながら、ぐたりと眠る……俗には船を漕こぐところさえ、これは筏いかだを流ていす体。

それに対して、そのまま松崎わかの分たもとつた袂たもとは、我ながら蝶かたが羽繕ていいをする心地であつた。

まだ十歩と離れぬ。

その物売の、布子の円い背中なぞへ、同じ木賃宿のそこが歪ゆがみ  
 なりの角から、町幅を、一息、苗代形に幅の広くなつた処があつ  
 て、思いがけず藁いらの堆たかい屋形が一軒ななめ。斜ななめに中空をさして鯉こいの鱗うろこの  
 背を見るよう、電信柱に棟の霞んで聳そびえたのがある。

空屋か、知らず、窓も、門かども、皮をめぐつた、面ひとに齊おおきしく、大

な節穴が、二ツずつ、がツくり窪くぼんだ眼まなこを揃そろえて、骸がいこつ骨こつを重ねたような。

が、月には尾花か、日向ひなたの若草ひさし、廂ひさしに伸びたも春めいて、町から中へ引込んだだけ、生ぬるいほどほかほかする。

四辺あたりに似ない大構えの空屋に、——二間ばかりの船板ふないたべい塀べいが水のぬるんだ堰いせきに見えて、その前に、お玉杓たまじやくし子の推おしくら競くらで群さまる状さまに、大勢小児こどもが集たかつていた。

おけらの虫は、もじやもじやもじやと皆動揺どよめく。

その癖静しずまつて声を立てぬ。

直じきその物売の前に立ちながら、この小さな群集の混合つたのに気が附つかなかつたも道理こそ、松崎は身に染そみだ狂言最中見ぶ

つのひつそりした棧敷さじきうらを来たも同じだと思つた。

役者は舞台上で飛んだり、刎はねたり、子供芝居が、ばたばたばた。

## 五

大当り、尺しゃくまと的てきに矢の刺さつただけは新粉屋の看板より念入な

り。一面藤の花に、蝶々まで同じ絵を彩つた一張の紙幕を、船板

塀の木戸口に渡して掛けた。正面前の処へ、破やれむしろ筵あやしを三枚ばか

り、じとじとしたのを敷込んだが、日に乾くか、怪あやしい陽炎となつ

て、むらむらと立つ、それが舞台。

取巻いた小児こどもの上を、鮒ふな、鯰なます、黒い頭、緋鯉ひごいと見たのは赤い切きれ



の結綿ゆいわた仮髪かづらで、幕の藤の花の末あおを煽あおつて、泳ぐようになが視められた。が、近附いて見ると、坂東、沢村、市川、中村、尾上、片岡、役者の連名も、くだんのごとし如件、おそば、お汁粉、牛鍋など、紫の房の下に筆ぶとに記してあつた……

松崎が、立寄つた時、カイカイカイと、ちようど堀の内かかで木が入つて、紺きものの衣服に、黒い帯しりした、円い臀かかが、蹠かかをひよい、と上げて、頭からその幕へ潜つたのを見た。——筵舞台は行儀わるく、両方へ歪ゆがんだが。

半月形に、ほかほかとのぼせた顔して、取廻わした、小さな見物、わやわやとまたひととよめ一動揺。

中に、目の鋭い屑屋くずやが一人、箸はしと籠かごを両方に下げて、挟んで食

えそんな首は無しか、とじろじろと睨廻ねめまわす。

もう一人、袷あわせの引解ひつときらしい、汚れた縞しまの単衣ひとえものに、縷よ縷れれの三尺で、頬ほお被かぶりした、ずんぐり肥ふとった赤ら顔あにいの兄あにい哥いが一人、のつそり腕組まじをして交まじる……

二人ばかり、十二三、四五ぐらいな、子守ちびの娘むすめが、横よこちよ、と猪首いくびに小兒こどもを背負しよつて、唄うたも唄うたわず、肩かた、背せを揺ゆる。他ほかは皆みな、茄な子すびの蔓つるに蛙つるの子。

楽屋——その塀うちの中で、またカチカチと鳴なった。

処とへ、通とおから、ばらばらと駈かけて来た、別に二三人の小兒こどもを先まに、奴やつこを振ふらせた趣まで、や！あの美ひとしい女むすめと、中なか折おれの下したに眉まゆの濃あい、若い紳士しんしと並ならんで来たのは、浮世うきよの底そこへ霞あを引ひいて、天あ

降まくだつたように見えた。

ここだ、この音だ——と云つたその紳士の言ことばを聞いた、松崎は、やっぱり渠等かれらも囃子の音に誘われて、男女なんによのどちらが言出したか、それは知らぬが、連立つて、先刻さつきの電車の終点から、ともに引寄せられて来たものだと思つた。

時に、その二人も、松崎も、大方この芝居の鳴物が、遠くまで聞えたのであろうと頷うなずく……囃子はその癖、ここに尋ね当つた現い下まは何も聞えぬ。……

絵の藤の幕間まくあいで、木は入つたが舞台は空しい。

「幕が長いぜ、開けろい。遣やらねえか、遣やらねえか。」

とずんぐり者の頬被ほおかぶりは肩かたを揺ゆつた。が、閉つたばかり、いささ

かも長い幕間でない事が、自分にも可笑しいか、  
 拭ひの結むす目びめを、ひこひここと遣つて笑う。  
 鼻はな先なつききの手てぬぐ

様子が、思いも掛けず、こんな場所、子供芝居の見物の群むれに  
 た、美しい女ひとに対して興奮したものらしい。

実際、雲の青い山の奥から、淡うすいろどり彩ゆうぜんの友染ゆうぜんとも見える、名  
 も知れない一輪の花が、細谷川を里近く流れ出いでて、淵ふちの藍あいに影  
 を留めて人目に触れた風情あり。石斑魚うぐいが飛んでも松葉が散つて  
 も、そのまま直ぐに、すらすらと行方も知れず流れよう、それを  
 しばらくでも引留めるのは、ただちつとも早く幕を開ける外はな  
 い、と松崎の目にも見て取られた。

「頼むぜ頭取。」

ほおかぶり  
頬被ががまた喚わめく。

## 六

あたかもその時、役者の名の余白に描いいた、福面おかめ女、瓢箪ひよつとこ男  
の端はをばさりと捲まくると、月代さかやき茶色に、半白ごましおのちよん  
で、眉毛さがの下さつた十ばかりの男この児こが、洩団扇しふうちわの柄をを引ひ搦つかん  
で、ひよこりと登場。

「待つてました。」

と頬被がが声をを掛かけた。

奴やつこは、とぼけた目ををきよろんと遣やつたが、

「ちえ、小道具め、しようがねえ。」

と高慢な口を利いて、尻端折りの脚をすつてん、刎ねるがごとく、二つ三つ、舞台をくるくると廻るや否や、背後向きに、ちよつきり結びの紺兵児の出尻で、頭から半身また幕へ潜つたが、すぐに摺抜けて出直したのを見れば、うどん、当り屋とのたくらせた穴だらけの古行燈を提げて出て、筵の上へ、ちよんと直すすりぬと、奴はその蔭で、膝を折つて、膝開けに踏張りながら、件のやっこ渋団扇で、ばたばたと煽いで、台辞あお。

「米が高値たかいから不景気だ。媽々かかあめにまた叱られべいな。」

でも、ちよつと含羞はにかんだか、日に焼けた顔を真赤まっかに俯向うつむく。同じ色した渋団扇、ばさばさばさ、と遣つた処は巧緻うまいものなり。

「いよ、牛鍋。」と頬被。

片岡牛鍋と云うのであろう、が、役は饅飴屋うどんやの親仁おやじである。

チャーン、チャーン……幕うちの中で鉦かねを鳴らす。

——迷児まいごの、迷児の、迷児やあ——

呼ばわり連れると、ひよいひよいと三人出た……団栗どんぐりほどな

背丈を揃えて、紋羽もんばの襟卷くびを頸くびに卷いた大屋様。月代さかやきが真青まっさお

で、鬢びんの膨れた色身いろみな手代、うんざり鬢いさみの侠いさみが一人、これが前さきへ

立って、コトン、コトンと棒を突く。

「や、これ、太吉さん、」

と差配おおよさま様声を掛ける。中の青月代あおさかやきが、提灯ちようちんを持替えて、

「はい、はい。」と返事をした。が、界隈かいわいの荒れた卵塔場から、

葬とむらい礼あとを、引攫ひっさらつて来たらしい、その提灯は白張しらはりである。

大屋は、カーンと一つ鉦かねを叩いて、

「大分夜よが更けました。」

「亥いのこく刻過ぎでございましょう、……ねえ、頭かしら。」

「そうよね。」

と棒をコツン、で、くすくすと笑う。

「笑うな、真面目まじめに真面目に、」と頬被まがまた声を掛ける。

差配様が小首を傾け、

「時に、もし、迷兎、迷兎、と呼んで歩ある行きますが、誰だれ某それと名

を申して呼びませいでも、分りますものでござりましょうかね。」

「私わっしもさ、思ってるんで。……どうもね、ただこう、迷兎と呼ん



だんじや、前方さきで誰の事だか見当が附くめえてね、迷児と呼ばれて、はい、手前でござい、と顔を出す奴やつもねえもんでさ。」とうんざり鬢が引取つて言う。

「まずさね……それで闇くらがりから顔を出せば、飛んだ妖怪ばけものでござりますよ。」

青月代の白男しろおとこが、袖を開いて、両方を掌てでおさえ、

「御道理ごもつともでございますとも。それがでございますよ。はい、こうして鉦太鼓で探搜さがしに出ます騒動ではございますが、捜されまます御当人の家うちへ、声が聞えますような近い所で、名を呼びましては、  
表おもてむき向むかの事でも極きまりが悪うございましょう。それも小児こどもや爺婆じじばば

ならまだしも、取つて十九という妙齡としごろの娘の事でございますか

ら。」

と考え考え、切れ切れに台辞を運ぶ。

その内も手を休めず、ばっばつと赤い団扇、火が散るばかり、

これは鮮明<sup>あざやか</sup>。

七

青月代は辿々<sup>たどたど</sup>しく、

「で、ごごいますから、遠慮をしまして、名は呼びません、でございしましたが、おっしゃる通り、ただ迷児迷児と喚<sup>わめ</sup>きました処で分るものではごごいません。もう大分町も離れました、徐々<sup>そろそろ</sup>娘

の名を呼びましょう。」

「成程々々、御心附至極の儀。そんなら、ここから一つ名を呼んで捜す事にいたしましょう。頭かしら、音頭を願おうかね。」

「迷児の音頭は遣りつけねえが、ままよ。……差配おおやさん、合方だ。」

チャーンと鉦かねの音。

「お稲いなさんやあ、——トこの調子かね。」

「結構でございますね、差配さん。」

差配はも一つ真顔でチャーン。

「さて、呼声に名が入りますと、どうやら遠い処で、幽かすかに、はあい……いと可哀あわれな声。」

「変な声だあ。」

と頭かしらは棒ゆすを揺ゆつて震える真似する。

「この方、総入歯で、若い娘の仮こわいろ声だちね。いえさ、したが何となく返事をしそうで、大おおきに張合おひきが着きましたよ。」

「その気で一つ伸のみましょうよ。」

三人この処で、声を揃えた。チャーン——

「——迷児の、迷児の、お稲さんやあ……」

と一ひと列ならび、筵むしろの上を六尺ばかり、ぐるりと廻る。手足も小さ

く仇あどない顔して、目立かつた仮髪かづらの鬚まげばかり。麦藁むぎわら細工さいくが化けた

ようで、黄色の声で長ませた事、ものを云う笛を吹くか、と希有けぶに

聞える。

美しい女ひとは、すつと薄色の洋傘パラソルを閉めた……ヴェールを脱いだように濃い浅黄の影が消える、と露の垂りそうな清すずしい目で、同伴れの男に、ト瞳を注ぎながら舞台を見返す……その様子が、しばらく立停たちどまろうと云うらしかった。

「鍋焼餛飩なべやきうどん……」

と高らかに、舞台上で目を眠るまで仰向あおむいて呼んだ。

「……ああ、腹が空いた、餛飩屋。」

「へいへい、頭かしら、難ありがと有うござります。」

うんざり鬢びんは額を叩いて、

「おつと、礼はまだ早かろう。これから相談だ。ねえ、太吉さん、差配さん、ちよつぴり暖まって、行こうじゃねえかね。」

「賛成。」

と見物の頬被りは、反そりを打つて大おおに笑う。

仕種しぐさを待構えていた、饅飴屋小僧は、これから、割わり前まえの相談

でもありそうな処を、もどかしがって、

「へい、お待遠様で。」と急いで、渋団扇で三人へ皆配る。

「早いんだい、まだだよ。」

と差配になつたのが地声で甲かん走ばしつた。が、それでも、そろぞ

ろそろそろと口で言い言い三人、指二本で搔か込こむ仕形しかた。

「頭かしら、……御町内様も御苦労様でございます。お捜しなさいませ

の、お子供衆で？」

「小児なものかね、妙としごろ齢ろでございますよ。」

と青月代が、襟を扱しいて、ちよつと色身で応答あしう。

「へい、お妙齡、殿方でござりまするか、それともお娘御で。」

「妙齡の野郎と云う奴があるもんか、初厄の別嬪べっぴんさ。」と頭かしらは口で、ぞろりぞろり。

「ああ、さて、走り人びとでござりますの。」

「はしり人というのじゃないね、同じようでも、いずれ行方は知れんのだが。」

と差配は、チンと涙はなをかむ。

美しい女ひとの唇くちびるに微笑ほほえみが見えた……

「いつの事、どこから、そのお姿が見えなくなりました。」  
と鮎あし屋は、洪むしろ團扇むしろを筵つに支たいて、ト中腰ちゆうこになつて訊きく。

## 八

おおよ  
差配は溜息ためいきと共に気取つてうなず頷き、

「いつ、どこでと云つてね、お前めえ、縁日の宵の口や、顔見世の夜明から、見えなくなつたというのじゃない。その娘はね、長い間煩らつて、寝ていたんだ。それから行方ゆくえが知れなくなつたよ。」

子供芝居の取留めのない台辞せりふでも、ちつと変な事を言う。

「へい。」

舞台の饅飩屋も異な顔で、

「それでは御病気を苦になさつて、死ぬ気でかけだ駈出したのでござり



ますかね。」

「寿命だよ。ふん、」と、も一つかんで、差配は鼻紙を袂たもとへ落す。

「御寿命、へい、何にいたせ、それは御心配な事で。お怪我けががなければ可ようございます。」

「賽さいの河原は礫こいし原はら、石があるから躓つまずいて怪我をする事もあるうかね。」と陰気に差配。

「何を言わつしやります。」

「いえさ、鯉鮓屋さん、合点の悪い。その娘はもう亡くなつたんでございますよ。」と青月代が傍そばから言った。

「お前様も。死んだ迷児まいごという事が、世の中にござりますかい。」

「六道の闇やみに迷えば、はて、迷児ではあるまいか。」

「や、そんなら、お前様方は、亡者もうじやをお捜しなさりますのか。」

「そのための、この白張提灯しらはりぢようちん。」

と青月代が、白粉おしろいの白けた顔を前へ、トぶらりと提げる。

「搜やみいて、搜やみいて、暗から闇へ行く路じや。」

「ても……気味の悪い事を言いなさる。」

「饅飩屋、どうだ一所に来るか。」

と頭かしらは鬼のごとく棒を突出す。

饅飩屋は、あツと尻餅。

引被ひっかぶせて、青月代が、

「ともに冥途めいどへ連行つれゆかん。」

「来きたれや、来れ。」と差配おおやは異変な声こわづくろい繕お。

「ひとたま一堪りもなく、まげかつら鬻飯屋はのめり伏した。渡団扇で、頭を叩くと、ちよんまげかつら鬻飯髪が、がさがさと鳴る。」

「占めたぞ。」

「くいに喰遁げ。」

とさそひ囁き合うと、三人の児は、ひよいと躍つて、蛙のようにポンポン飛込む、と幕の蔭に声ばかり。

——迷児の、迷児の、お稲さんやあ——

描ける藤は、どんよりと重く匂つて、おなじ色に、きらきら閃々と金糸のきらめく、美しい女ひとの半襟と、陽炎に影を通わす、いまわり居周囲は時にひっそり寂寞した、にんず楽屋の人数を、狭い処に包んだせいにか、びらまく張紙幕が中ほどから、見物に向いて、風をはら孕んだか、と膨れて見える……

この影が覆蔽かぶさるであろう、破やれむしろ筵しよは鼠色ねずみいろに濃くなつて、蹲しゃがみ込こんだ児等こどもの胸へ持上つて、蟻ありが四五足、うようよと這はつた。……が、なぜか、物の本の古びた表面おもてへ、——来れや、来れ……と仮名でかきちらす形がある。

見つつ松崎が思うまで、来れや、来れ……と言つた差配おおよの言葉は、怪しいまで陰に響いて、幕の膨らんだにつけても、誰か、大人が居て、蔭で声を助けすけたらしく聞えたのであつた。

見物の児等は、神妙に黙つて控えた。

ほおかぶり

頬被ほおかぶりのずんぐり者は、腕を組んで立つたなり、こくりこくりと居眠る……

饅頭屋が、ぼやんとした顔を上げた。さては、差置いた荷のか

わりの行燈あんどんも、草紙の絵ではない。

蟻は隠れたのである。

## 九

「狐か、狸か、今のは何じやい、どえらい目に逢わせくさった。」  
と饅頭屋は坂塀はずれに、空屋の大屋根から空を仰いで、茫ぼんや  
然りする。

美しい女ひとと若い紳士の、並んで立った姿が動いて、両方木賃きちんや  
宿どの羽目板の方を見向いたのを、——無台が寂しくなったため、  
もう帰るのであろうと見れば、さにあらず。

そこへ小さな縁台を据えて、二人の中に、ちよんぼりとした円まるまげるまげを俯向けうつむけに、揉手もみてでお叩頭しげをする古女房が一人居た。

「さあ、どうぞ、旦那様、奥様、これへお掛け遊ばして、いえ、もう汚いのでございますが、お立ちなすつていらつしやいますよ、ちつとは増ましでございます。」

と手拭てぬぐいで、ごしごし拭いを掛けつつ云う。その手で——一所に持って出たらしい、踏台が一つに乗せてあるのを下へおろした。「いや、俺おれたちは、」

若い紳士は、手首白いのを挙げて、払い退のけそうにした。が、美しい女ひとが、意を得たという晴やかな顔して、黙つてそのまま腰を掛けたので。

「難<sup>ありがと</sup>有<sup>う</sup>う。」

渠<sup>かれ</sup>も齊<sup>ひと</sup>しく並んだのである。

「はい、失礼を。はいはい、はい、どうも。」と古女房は、まくし掛けて、早口に饒舌<sup>しゃべ</sup>りながら、踏台を提<sup>こ</sup>げて、小児<sup>こども</sup>たちの背後<sup>うしろ</sup>を、ちよこちよこ走り。で、松崎の背後<sup>うしろ</sup>へ廻る。

「貴方<sup>あなた</sup>様は、どうぞこれへ。はい、はい、はい。」

「恐縮ですな。」

かねて期<sup>ご</sup>したるもののごとく猶<sup>ため</sup>予らわず腰を落着けた、……松崎は、美しい女<sup>ひと</sup>とその連<sup>つれ</sup>とが、去る去らないにかかわらず、——舞台の三人が鉦<sup>かね</sup>をチャーンで、迷児の名を呼んだ時から、子供芝居は、とにかくこの一幕を見果てないうちは、足を返すまいと思

つていた。

声々に、可哀あわれに、寂しく、遠方おちかたを幽かすかに、——そして幽冥ゆうめいの界さかいを暗やみから闇へ捜さが廻しまわると言つた、厄年十九の娘の名は、お稲と云つたのを鋭く聞いた——仔細しさいあつて忘れられぬ人の名なのであるから。——

「おかみさん、この芝居はどういう筋だい。」

「はいはい、いいえ、貴下あなた、子供が出たらめに致しますので、取留めはございませんよ。何の事でございますか、私どもは一向に分りません。それでも稽古けいこだの何のと申して、それは騒さわぎでございましてね、はい、はい、はい。」

で手を揉もみ手を揉もみ、正面まともには顔を上げずに、ひよこひよこし



て言う。この古女房は、くたびれた藍あいらろ色の半纏はんてんに、茶の着も  
ので、紺足袋せつたばきに雪駄穿せつたばきで居たのである。

「馬鹿にしやがれ。ヘッ、」

と唐突だしぬけに毒を吐いたは、立睡たちねむりで居た頬被りほかひで、弥蔵やぞうの肱ひじ  
を、ぐいぐいと懐ふところ中から、八ツ当りに突掛つつかけながら、

「人、面白くもねえ、貴方様お掛け遊ばせが聞いて呆あきれら。おは  
いはい、襟えりもと許もとに着きりやがって、ヘッ。俺の方が初手はつてツから立っ  
てるんだ。衣類きものいに脚が生えやしめえし……草臥くたびれるんなら、こつ  
ちが前さきだい。服装みなりで価値ねだんづけをしやがって、畜生ちくせいめ。ああ、人間  
下さがりたくはねえもんだ。」

古女房は聞かない振ふりで、ちよこちよこと走はしって退のいた。一体、

縁台まで持添えて、どこから出て来たのか、それは知らない。そうして引返したのは町の方。

そこに、先刻の編笠目深な新粉細工が、出岬に霞んだ捨小舟という形ちで、寂寞としてまだ一人居る。その方へ、ひよこひよこ行く。

ト頬被りは、じろりと見遣つて、

「ざまあ見ろ、巫女の宰相、活きた兄哥の魂が分るかい。へつ、」と肩をしゃくりながら、ぶらりと見物の群を離れた。

ついでに言おう、人間を挟みそうに、籠と竹箸を構えた薄気味の悪い、黙然の屑屋は、古女房が、そつち側の二人に、縁台を進めた時、ギロリと踏台の横穴を覗いたが、それ切りフイと居

なくなつた。……

いま、腰を掛けた踏台の中には、ト松崎が見ても一枚の屑も無い。

十

「おい、出て来ねえな、おお、大入道、出じやねえか、遅いなあ。」

少々舞台に間が明いて、魅つままれたなりの鯁うどん鈍こそう小僧は、てれた顔で、……幕越しに楽屋を呼んだ。

幕の端はじから、以前の青月代あおさかやきが、黒坊くろんぼの気か、俯うつむ向けに仮髪かつら

ばかりを覗のぞかせた。が、その絵の、狐の面が抜出したとも見え  
 るし、古綿の黒雲から、新粉細工の三日月が覗くとも覗ながめられる。  
 「まだじゃねえか、まだお前、その行燈あんどんがかがみにならねえよ  
 ……科しぐさが抜けてるぜ、早く演やんねえな。」  
 と云つて、すぽりと引込ひっこむ。——はてな、行燈が、かがみに化  
 ける……と松崎は地の凸凹でこぼこする踏ふみだい台の腰を乗出す。  
 同じ思いか、面影おもかげも映しそうに、美しい女ひとは凝じっと視みた。ひと  
 り紳士は気の無い顔して、反身そりみながらぐったりと凭より掛かった、杖ステッキ  
 の柄を手袋の尖で突いたものなり。

饅飩屋は、行燈に向直ると、誰も居ないのに、一人で、へたへ  
 たと挨あいさつ拶する。

「おいで光栄なさいまし。……直ぐと暖めて差上げます。今、もし、飛んだお前さん、馬鹿な目に逢いましてね、火も台なしでござりませぬ。へい、辻の橋の玄徳げんとくいなり稻荷様は、御身分柄、こんな悪戯いたずらはなさりません。狸かわうそか獺かわうそでござりましょう。迷兎の迷兎の、——とかねたた鉦を敲いて来やがつて餛飩を八杯攫さりました……お前さん。」

と滑稽おどけた眉毛を、寄せたり、離したり、目をくしやくしやと饒し舌やべつたが、

「や、一言いちごんも、お返事なしだね、黙然だんまりぼう坊様。鼻だの、口だの、ぴこぴこ動いてばかり。……あれ、誰か客人だと思つたら——私わしの顔だ——道理で、兄弟分だと頼母たのもしかつたに……宙に流れる川はなし——七たなばた夕様でもないものが、銀あまのがわ河には映るまい。星

も隠れた、真暗、」

と仰向けに、空を視る、と仕掛けがあつたか、頭の上のその板  
 塀越、幕の内か潜らして、両方を竹で張つた、真黒な布の一  
 張、箆の上へ、ふわりと投げて颯と拵げた。

と見て、知りつつ松崎は、俄然として雲が湧いたか、とぎよつ

とした、——電車はあつても——本郷から遠路を掛けた当日。

麗さも長閑さも、余り積つて身に染むばかり暖かさが過ぎたので、  
 思いがけない俄雨を憂慮ぬではなかつた処。

彼方の新粉屋が、ものの遠いように霞むにつけても、家路遙か  
 な思いがある。

また、余所は知らず、目の前のざつと劇場ほどなその空屋の裡

には、本所の空一面に漲みなぎらす黒雲は、畳込んで余りあるがごとくに見えた。

暗い舞台で、小さな、そして爺じいさま様の饅頭屋は、おっかな、吃びつく驚り、わなわな大袈裟おおげさに震えながら、

「何に映る……私わしが顔だ、——行燈あんどんか。まさかとは思うが、行

燈かか、行燈か？……返事をせまいぞ。この上手前てめえに口を利かれて

は叶かなわねえ。何分頼むよ。……面つらの皮は、雨風にめくれたあとを、

幾たびも張替えたが、火事には人先に持って遁にげる何十年以来このかたの古馴染ふるなじみだ。

馴染がいにに口を利くなよ、私わしが呼んでも口を利くなよ。はて、何に映る顔だ知らん。……口を利くな、口を利くな。」

……と背の低いのが、滅入込みめりこそうに、大な仮髪おおきかつらの頸うなじを窘すくめ、  
ひツつりこぶしような拳を二つ、耳の処おとへ威おどすがごとく、張肱はりひじに、し  
つかと握つかつて、腰をくなくなると、拔足差足。

で、目を据え、眉を張つて、行燈に擦寄り擦寄り、

「はて、何に映つた顔だ知らん、行燈か、行燈か、……口を利く  
なよ、行燈か。」

と熟じつと覗のぞく。

途端に、沈んだが、通る声で、

「私……行燈だよ。」

「わい、」と叫んで、饅飩屋は舞台を飛退とびのく。



この古行燈が、仇あだも情なさけも、赤くこぼれた丁ちようじ子のごとく、煤すすの  
中に色を籠こめて消えずにいて、それが、針の穴を通して、不意に  
口を利いたような女の声には、松崎もぎよつとした。

饅頭屋は吃びっくり驚の呼吸を引いて、きよとんとしたが

「俺おいらあ可いや厭やだぜ。」と押殺した低こごえ声で独ひとりごと言を云つたと思つと、  
ばさりと幕まくず摺れに、ふらついて、隅から蹠よろ躑りけ込んで見えなくな  
つた。

時に——私……行燈だよ、——と云つたのは、美しい女ひとである  
事に、松崎も心附いて、——驚いて楽屋へ遁にげた小児こどもの状さまの可おかし笑

さに、莞爾にっこり、笑えみを含んだ、燃ゆるがごときその女の唇ひとを見た。

「つい言ツちまったのよ。」

と紳士を見向く。

「困った人だね、」

ステッキと杖を取って、立構えをしながら、

「さあ、行こうか。」

「可いいわ、もうちつと……」

「恐こわ怖わいよう。」

と子守の袂たもとにぶら下つた小さな児が袖を引張ひっぱつて言う。

「こわいものかね、行燈じゃないわ。……綺麗な奥さんが言つたんだわ。」とその子守は背せなの子を揺ゆり上げた。

舞台を取巻いた大勢が、わやわやとざわついて、同音に、声を揚げて皆笑つた……小さいのが一側三側、ぐるりと黒く塊つたのが、変にここまで間を措いて、思出したように、遁込んだ饅頭屋の滑稽な図を笑つたので、どつというのが、一つ、町を越した空屋の裏あたりに響いて、壁を隔てて聞くようにぼやけて寂しい。

「東西、東西。」

青月代が、例の色身に白い、膨りした童顔を真正面に舞台に出て、猫が耳を撫でる……トといった風で、手を挙げて、見物を制しながら、おでんと書いた角行燈をひよいと廻して、ト立直して裏を見せると、かねて用意がしてあつた……その一小間が藍を濃く真青に塗つてあつた。

行燈が化けると云った、これが、かがみのつもりでもあろう、  
 が、上を蔽おほうた黒布の下に、色が沈んで、際立つて、ちようど、  
 間近な縁台の、美しい女ひとと向むきあ合せに据えたので、雪なす面おもてに影  
 を投げて、媚なまめかしくも凄すこくも見える。

青月代は翻ひらり然と潜くぐった。

それまでは、どれもこれも、吹矢に当つて、バツタリと細工も  
 のが顕あらわれる形に、幕へ出入りのひよつこらさ加減、絵に描かいた、  
 こまつたけ  
 小松茸、大きな蛤はまぐり十ばかり一所に転げて出そうであつたが。

舞台に姿見の蒼あおい時よ。

はじめて、白玉のごとき姿を顕す……一人にんの立女形たておやま、撫肩し  
 なりと脛はぎをしめつつ棲つまを取つた状さまに、内端うちわに可愛かわいらしい足を運ん

で出た。糸も掛けない素の白身はくしん、雪の練糸ねりいとを繰るように、しなやかなものである。

背丈かっこう恰好、それも十一二の男の児が、文金高髻かつらの仮髪して、含羞はにかんだか、それとも芝居の筋の襯染したじめのためか、胸を啣くわえる俯う向き加減つむ、前髪の冷たさが、身に染む風情に、すべすべと白い肩をすくめて、乳を隠す嬌態しならしい、片手柔い肱ひじを外に、指を反らして、ひたりと附けた、その頤おとがいのあたりを蔽おおい、額も見せないで、なよなよと筵むしろに雪の踵かかとを散らして、静しずかに、行燈の紙の青い前。

綿かと思ふやわらか柔かな背を見物へ背後うしろむきに、その擬えし姿見に向つて、筵に坐ると、しなつた、細い線を、左の白脛しらはぎに引いて片膝を立てた。

この膝は、松崎の方へ向く。右の搔かっこ込んで、その腰を据えた方に、美しい女ひとと紳士の縁台がある。

まだ顔を見せないで、打向つた青行燈の抽斗ひきだしを抜くと、そこに小道具の支度があつた……白粉刷毛おしろいばけの、夢の覚際さめぎわの合歡ねむの花、ほんのりとあるのを取つて、媚なまめかしく化粧をし出す。

知つてはいても、それが男の児とは思われない。耳朶みみたぼに黒子ほくろも見えぬ、滑なめらかな美しさ。松崎は、むぎと集たかつて血を吸うのが傷いたましさに、踏ふみだい台の蚊かをしきりに気にした

踏台の蚊は、おかしいけれども、はじめ腰掛けた時から、間を措いては、ぶんと一つ、ぶんとまた一つ、穴から唸つて出る……足と足を摺合わせたり、頭を掉つたり、避けつ払いつしていたが、日脚の加減か、この折から、ぶくぶくと溝から泡の噴く体に数を増した。

人情、なぜか、筵の上のその皓体こうたいに集たからせたくないの、背うしろ後へ、町へ、両の袂を叩いて払つた。

そして、この血に餓うめえて呻く虫の、次第いきおいに勢を加えたにつけても、天気模様の憂きづかわ慮しさに、居ながら見渡されるだけの空を覗のぞいたが、どこのか煙筒えんとつの煙の、一方に雪崩なだれたらしい隈くまはあつたが、黒しと怪あやしむ雲はなかつた。ただ、町の静しずかさ。板の間の乾からび

た、人なき、広い湯殿のようで、暖い霞の輝いて淀んで、濛い且  
みなぎつ漲る中に、蚊を思うと、その形、むらむら波を泳ぐ海月に似て、  
ほこよこた槩を横えて、餓えたる虎の唄を唄つて匆ねる。……

この影がさしたら、四ツ目あたりに咲き掛けた紅白の牡丹も曇  
 ろう。……はし嘴を鳴らして、ひらりひらりと縦横無尽に踊る。

が、うつつ現なのありさま光景は、のどか ひなか長閑な日中の、それが極度であつた。――

やがて、蚊ばかりではない、舞台上狐やら狸やら、太鼓をたた敲き  
 笛を吹く……本所名代の楽器に合わせて、猫が三足。小夜具を被  
 つて、仁王立、だち一斗樽のだる三ツ目入道、裸の小兒と一所になつて、  
 さす手の扇、ひく手の手拭、揃つて人も無げにおどりいだ踊出した頃は、



俄にわか雨あめを運ぶ機関車のごとき黒雲が、音もしないで、浮世やぶれの破やぶれめを切張きりばりの、木賃宿の数の行燈、薄暗いまで屋根を圧して、むくむくと、両国橋から本所の空を渡ったのである。

次第は前後した。

これより前さき、姿見に向つた裸の児が、濃い化粧で、襟えり白粉おしろいを襟長えりながく、くツきりと粧よそおうと、カタンと言わして、刷毛はけと一所いこに、白粉おしろいを行燈いんとうの抽斗ひきだしに蔵しまつた時、しなりとした、立膝たちひざのまま、見物みぶつへ、ひよいと顔を見せたと思え。

島田ばかりが房ふさ々ふさと、やあ、目も鼻も無い、のっぺらぼう。唇くちびるばかり、埋め果てぬ、雪の紅梅しんばい、蕊しべ白く莞爾にっこりした。

はつと美しい女ひとは身を引いて、肩かたを摺すつた羽織うゑの手先を白々と

紳士の膝へ。

額も頬も一分、三分、小鼻も隠れたまで、いや塗ったところさえ。白粉で消した顔とは思うが、松崎さえ一目見ると変な気がした。

そこへ、件の三ツ目入道、どろどろどろと顕れけり

十三

樽を張子で、鼠色の大入道、金銀張分けの大の眼を、行燈見越に立はだかる、と縄からげの貧乏徳利をぬいと突出す。

「丑満の鐘を待兼ねたやい。……わりや雪女。」

とドス声で甲かんを殺す……この熊くま漢おとこの前に、月からこぼれた  
 白い兔うさぎ、天人の落し児といった風情の、一ひとつ束つかねの、雪の膚はだは、  
 さては化夥ばけな間なまの雪女であつた。

「これい、化粧が出来たら酌をしろ、ええ。」

と、どか胡坐あぐら、で、着ものの裾すそが堆うづたかい。

その地響こたきが膚こたにこた、震える状さまに、脇すばの下を窄すぼめるから、

雪女は横坐りに、

「あい、」と手を支つく。

「そりや、」

と徳利を突出した、入道は懐あわびから、貝がを掴つか取みとつて、胸

を広く、腕へ引着け、雁がんの首を捻ねじるがごとく白鳥の口から注つが

せて、

「わりや、わなわなと震えるが、素膚すはだに感じるか、いやさ、寒いか。」と、じろじろと視みつめて寛々たり。

雪女細い声。

「はい……冷とうござんすわいな。」

「ふん、それはな、三途河そうずかの奪衣婆だつえばに衣きものを剥はがれて、まだ間が無うて馴なれぬからだ。ひくひくせずと堪たえくされ。雪女が寒いと吐ぬかすと、火が火を熱い、水が水を冷い、貧乏人が空腹ひだるいと云うようなものだ。汝うぬが勝手の我ままだ。」

「情なさけない事おつしやいます、辛うて辛うてなりませんもの。」

とやっぱり戦わななく。その姿、あわれに寂しく、生なまなま々とした白魚

の亡者に似ている。

「もつともな、わりや……」

言い掛けた時であつた。この見越入道、ふと絶句で、大な樽おおきの面つらを振つて、三つ目を六つに晃々ぎらぎらときよろつかす。

幕の蔭と思う絵の裏で、誰とも知らず、静まつた藤の房に、生なまぬる温まぬるい風の染む氣勢けはいで、

「……紅蓮ぐれん、大紅蓮、紅蓮、大紅蓮……」と後見うしろをつけたものがある。

「紅蓮、大紅蓮の地獄に來きたつて、」  
と大入道は樽の首を揺据ゆりすえた。

「わりや雪女となりおつた。が、魔道の酌しやくとり取、枕まくらぞい添、芸げ

いしゃ、じよろう  
 妓、遊女のかえ名と云うのだ。娑婆、人間の処女で……」  
 また絶句して、うむと一つ、樽に呼吸を詰めて支えると、ポカ  
 ンとした叩頭をして、

「何だっけね、」

と可愛い声。

「お稲、」と雪女が小さく言った。

松崎は耳を澄ます。

と同時であつた。

「……お稲、お稲さんですつて、……」と目のふちに、薄く、行  
 燈の青い影が射した。美しい女は、ふと紳士を見た。

「お稲荷、稲荷さんと云うんだね、白狐の化けた処なんだろ

う。」

わけもなくそう云つて、紳士は、ぱつと巻まきた蓑たばこに火を点ずる。その火が狐火のように見えた。

「ああ、そうなのね。」

美しい女はひとうなず頷いたのである。

松崎も、聞いて、成程そうらしくも見て取つた。

「むむ、そのお稲で居た時の身の上話、酒の肴さかなに聞かさんかい。や、ただわなわなと震えくさる、まだ間が無うて馴れぬからだ。

こりや、」

と肩へむむと手を掛けると、ひれ伏して、雪女は溶けるようにさめざめ漣さめざめ然と泣く。

## 十四

「陰気だ陰気だ、此奴滅入こいつめいつて気が浮かん、こりや、汝等出わいらて燥はしやげやい。」

三ツ目入道、懐手の袖をは匆ねて、飽あわびつかい貝の杯を、大でかく弧こを描いて樂屋を招く。

これの合図に、相馬内裏そうまだいり古御所ふるごしよの管絃。笛、太鼓に鉦かねを合あわせて、トツピキ、ひやら、ひやら、テケレンどん、幕あおを煽あおつて、どやどやと異類異形が踊いつて出いでた。

狐が笛吹く、狸が太鼓。猫が三足、赤手拭、すツとこ被かぶり、吉



原かぶり、ちよと吹流し、と気取るも交つて、猫じや猫じやの拍子を合わせ、トコトンと筵むしろを踏むと、塵ちりほこり埃ほこり立交る、舞台上に赤黒い渦を巻いて、吹流しが腰をしやなりと流すと、すつとこ被りが、ひよいと匆はねる、と吉原被りは、ト招ぎの手附。

狸の面、と、狐の面は、差配はげの禿はげと、青月代あおさかやきの仮髪かつらのまま、鯁ごまし鈍屋おあたまの半白頭ごましおあたまは、どつち付かず、鼬いたちのような面を着て、これが鉦で。

時々、きちきちきちきちちという。狐はお定りのコンを鳴く。狸はあやふやに、モウと唸うなつて、膝ひざにのせた、腹鼓。

囃子はしに合せて、猫が三足、踊る、踊る、いや踊る事わ。

青い行燈とその前に突伏つつぶした、雪女の島田のまわりを、ぐるり

ぐるりと廻るうちに、三ツ目入道も、ぬいと立って、のしのしと踊出す。

続いてはやしかた囃方そうおど惣踊り。フト合方が、がらりと替つて、楽屋でさみせん三味線の音ねを入れた。

——必ずこの事、この事必ず、丹波の太郎に沙汰するな、この事、必ず、丹波の太郎に沙汰するな——

と揃つて、異口同音くちぐちに呼ばわりながら、水車みずぐるまを舞込むごとく、次第びきに、ぐるぐるぐる。……幕へ衝つと消える時は、何ものか居て、操りの糸を引手ひつたぐ繰るように颯さつと隠れた。

筵舞台に残つたのは、青行燈あおあんどんと雪女。

悄しおれて、一人、ただうなだれているのであつた。

上なる黒い布は、ひらひらと重くなった……空は化物どもが惣踊りに踊る頃から、次第に黒くなったのである。

美しい女ひとは、はずして、膝の上に手首に掛けた、薄色のシヨオルを取つて、撫肩うなじの頸うなじに掛けて身繕い。

此方こなたに松崎ももう立とうとした。

青月代が、ひよいと覗のぞいた。幕の隙間へ頤あごを乗せて、

「誰か、おい、前掛まえかけを貸してくんな、」と見物を左右に呼んだ。

「前掛を貸しておくれよ、……よう、誰でも。」

美しい女ひとから、七八人小児こどもを離れて、二人並んでいた子守の娘が、これを聞くと真先まっさきにあとじさりをした。言訳だけでも赤い紐の前掛をしていたのは、その二人ぐらいなもので、……他は皆、

横撫での袖とくいこぼしの膝、光るのはただ垢ばかり。

かたわら 傍から、また饅飩屋が出て舞台へ立つた。

「これから女おんながた形かたが演しどころ処ところなんだぜ。居所がわりになるんだけ

れど、今度は亡者じゃねえよ、活いきてる娘の役だもの。裸では不い可けえや、前まえだれ垂たれを貸しとくれよ。誰か、」

「後ご生しょうだつてば、」

と青月代も口を添える。

子守の娘はまた退しつた。

幼い達は妙にてれて、舞台の前で、土をいじつて俯うつむ向むいたのもあるし、ちよろちよろ町の方へ立つのもあつた。

「吝しみれただなあ。」

餛飩屋がチョツ、舌打する。

「貸してくれつてんだぜ、……きつと返すツてえに。……可哀かわいそ相うじやないか、雪女になつたなりで裸で居ら。この、お稲さんに着せるんだよ。」

と青月代も前へ出て、雪女の背筋のあたりを冷たそうに、ひたりと叩いた……

「前掛でなくては。不可いけないの？」

美しい人はすツと立つた。

紳士は仰向あおむいて、妙な顔色かおつき。

松崎の、うっかり帰られなくなったのは言うまでもなからう。

## 十五

「兄さん、他のものじや間に合わない？」

あきれ顔な舞台の二人に、美しい女は親しげにそう云った。

「他の物つて、」と青月代は、ちよんぼり眉で目をぱちくる。

「羽織では。」

美しい女は華奢な手を衣紋に当てた。

「羽織なら、ねえ、おい。」

「ああ、そんな旨え事はねえんだけど、前掛でさえ、しみつたれているんだもの、貸すもんか。それだしね、羽織なんて誰も持つてやしませんぜ。」

と饅飴屋は吐出すように云う。成程、羽織を着たものは、もの  
の欠片かけらも見えぬ。

「可よければ、私のを貸してあげるよ。」

美しい女ひとは、言ことばの下に羽織を脱いだ、手のしなひは、白魚が柳  
を潜くぐつて、裏は篝かがりび火がちらめいた、雁かりがねむすびの紋と見た。

「品しなこ子さん、」

紳士は留めようとして、ずツと立つ。

「可いいのよ、貴方あなた。」

と見返りもしないで、

「帯がないじゃないか、さあ、これが可いいわ。」と一所に肩すべを  
渡うすものつた、その白と、薄紫と、山が霞んだような派手な羅のシヨオル

を落してやる……

雪女は、早く心得て、ふわりとその羽織を着た、黒縮緬くろちりめんの紋もん着んつきに緋ひを襲かさねて、霞を腰に、前へすらりと結んだ姿は、あたたかも可よし、小児こどもの丈に裾すそを曳ひいて、振袖長く、影も三尺、左右に水が垂れるばかり、その不思議な媚なまめしさは、貸小袖に魂が入って立たつたとも見えるし、行燈ともしの灯おほを覆かうた裊たもと襠ちようちようの袂たもとに、蝴蝶ちようちようが宿とどつて、夢が徜徉さまようとも見える。

「難ありがと有う、」

「奥さん難有う。」

互たがひに、青月代と饅飩屋なぞらが、仮髪かづらを叩たたいて喜び顔。

雪女の、その……擬なぞらえた……姿見に向つて立つ後姿を、美しい



女ひとは、と視ながめて、

「島田も可いいこと、それなりで角かくしをさしたいようだわ……  
ああ、でも扱しご帯きを前帯じやどう。遊おいらん女にょのようではなくって、」  
「構かまわないの、お稲いなさんが寝ね衣まきの処ところだから、」

「ああ、ちよつと。」

と美しい女ひとが留とどめる間に、聞きかれた饅まん飩どん屋やはツイと引ひ込こむ。

「あら、やっぱりお稲いなさん、お稲いなさんですわ、貴あなた方かた。」

と言う。紳士を顧かみたま美しい女ひとの睫まつげが動ういて、目ま瞼ぶたが屹きつと引ひきし  
緊まつた。

「何、稲いな荷なりだよ、おい、稲いな荷なりだろう。」

紳士も並ならんで、見物こどもの小児こどもの上うから、舞ま台だいへ中なか折おれを覗のぞかせた。

「ねえ、この人の名は？……」

黒縮緬の雪女は、さすが一座に立女形の見識を取ったか、島田の一さえ、端然と済まして口を利こうとしないので、美しい女はまた青月代に、そう訊いた。

「嵐お萩ツてえの……東西々々。」

と翻然と隠れる。

「芸名ではない。役の娘の名を聞かしておくれ、何て云うのよ、お前。」

と美しい女は、やや急込んで言つて、病身らしく胸を压えた。

脱いだ羽織の、肩寒そうな一枚小袖の嬌娜姿、雲を出でたる月かと視れば、離れた雲は、雪女に影を宿して、墨絵に艶ある青

柳ぎの枝。

春の月の凄すごきまで、蒼青まっさおな、姿見の前に、立直つて、

「お稲です。」

と云つて、ふと見向いた顔は、目鼻だち、水に朧おぼろなものではなかつた。

十六

舞台は居所がわりになるのだ、と楽屋のものが云つた、——俳や優くしやは人に知らさないのを手際に化ものの踊るうち、俯向伏うつむきふしている間に、玉の曇くもりを拭ぬぐつたらしい。……眉は鮮麗あざやかに、目はぱ

つちりと張はりを持つて、口許くちもとの凜りんとした……やや強きついが、妙齡としごろのふつくりとした、濃い生際はえぎわに白粉おしろいの際立たぬ、色白な娘のその顔。

松崎は見て悚然ぞっとした……

名さえ——お稲です——

に肖おろかたとは迂哉きさくらぎ。今年如月きさくらぎ、紅梅ひに太陽ひの白き朝、同じ町内、

御殿町ごてんまちあたりのある家の門を、内端うちわな、しめやかな葬式とむらいにな

つて出た。……その日は霜しもが消えなかつた——居周圍いまわりの細君女房

連つらが、湯屋ゆやでも、髪結かみゆいでもまだ風説たやを絶たさぬ、お稲ちゃんと云

つた評判娘へいばんむすめにそっくりなのであつた。

「私も今はじめて聞いて吃驚びっくりしたの。」

その時、松崎の女房は、二階へばたばたと駈かけあが上り、御注進と云う処を、鎧よろいが縞しまの半纏はんてんで、草摺くさずり短な格子の前掛、ものが無常だけに、ト手は飜ひるがえさず、すなわち尋常に黒縹くろじゆす子の襟を合わせ、火鉢の向うへ中腰で細くなる……

髪も櫛くし巻まき、透切すきぎれのした縹子の帯、この段何とも致いたしかた方がない。亭主、号が春狐であるから、名だけは蘭菊らんぎくとでも奢おごつておけ。

春狐は小机を横に、座蒲団ざぶたんから斜ななめになつて、

「へーい、ちつとも知らなかつた。」

「私もさ……今ね、内の出窓の前に、お隣家となりの女房かみさんが立つて、通とおの方を見てしくしく泣いていなさるから、どうしたんですつて

聞いたんです。可哀相に……お稲ちゃんのお葬式とらういが出る所だつて、他家よその娘こでも最惜いとくつてしようがないつて云うんでしよう。——  
そう云えば成程何だわね、この節しじや多しばらく日姿を見なかつたわね、よくお前さん、それ、あの娘こが通ると云うと、箸をカチリと置いて出窓から、お覗のぞきだつてがね。」

苦笑いで、春狐子。

「余計な事を言いなさんな、……しかし惜おしいね、ちよつとないぜ、ここいらには、あのくらいな一枚絵は。」

「うっかり下町にだつてあるもんですか。」

「などと云うがね、お前もお長屋月並だ。……生きてるうちは、  
そうまでは讚ほめない奴やつさ、顔がちつと強きつすぎる、何のつてな。」

「ええ、それは 廂ひしがみ 髪かみ でお茶の水へ通つてた時ですわ。もう去年の春から、娘になつて、島田に結つてからといつたら、……そりや、くいつきたいようだったの。

髪かみのいい事なんて、もつとも盛さかりも盛だけでも。」  
「幾いくつ歳だ。」

「十九……明けてですよ。」

「ああ、」と思わず煙管きせるを落した。

「勿論、お婿さんは知らずらしいね。」

「ええ、そのお婿さんの事で、まあ亡くなつたんですよ。」  
「はつと思ひ、」

「や、自殺か。」

「おお吃驚びつくりした……慌てるわねえ、お前さんは。いいえ、自殺じゃないけれども、私の考えだと、やっぱり同おんなじ一いちだわ、自殺をしたのも。」

「じゃどうしたんだよ。」

「それがだわね。」

「焦しれったい女だな。」

「ですから静しずかにお聞きなさいなね、稲ちゃんの内ないしょ証かくに秘かくしていたんだそうですけど、あの娘こはね、去年の夏ごろから——その事で——狂きちがい気がいになったんですって。」

「あの、綺麗な娘こが。」

「まったくねえ。」



と俯向うつむいて、も一つ半纏の襟を合わせる。

## 十七

「妙齡としごろで、あの容色きりようですからね、もう前ぜんにから、いろいろ縁談もあつたそうですけれど、お極きまりの長し短しでいた処、お稲いなちやんが二三年前まで上つていなすつた……でも年二季の大温習おおやごらいには高台へ出たんだそうです……長唄のお師匠さんの橋渡しで。  
 家うちは千駄木辺で、お父さんは陸軍の大佐だか少将だか、それで非職ひいてるの。その息子さんひいが新しい法学士なんですつて……そこ  
 からね、是非、お嫁よめさんに欲ほしいって言ったんですとさ。

途中で、時々顔を見合つて、もう見合いなんか済んでるの。男の方は大変な惚ほれかた方なのよ。もつとも家同士、知合いというんでも何でもないんですから、口を利いたことなんて、そりやなかつたんでしようけれど、ほんに思えば思わるとやらだわね。」

半纏着の蘭菊は、指のさきで、火鉢の縁ふちへちよいと当つて、

「お稻ちゃんの方でも、嬉しくない事はなかつたんでしよう。：

…でね、内々その気だつたんだつて、…：お師匠さんは云うんですとき、——隣家となりの女房かみさんの、これは談話はなしよ。」

まだ卒業前ですから、お取極とりきめは、いずれ学校が済んでからツて事で、のびのびになつていたんだそうですがね。

去年の春、お茶の水の試験が済むと、さあ、その翌あくるひ日にでも

結納を取替わせる勢いきおいで、男の方から急せきこ込んで来たんでしよう。

けれども、こつちぢや煮切にえきらない、というのがね——あの、娘こにはお母つかさんがありません。お父さんというのは病身で、滅多に戸外そとへも出なさらない、何でも中気か何からしいんです——後家さんで、その妹さん、お稲ちゃんには叔母に当る、お婆さんのハイカラが取締つて、あの娘この兄さん夫婦が、すっかり内の事を遣やっているんだわね。

その兄さんというのが、何とか云う、朝鮮にも、満洲とか、台湾にも出店のある、大な株おおき式会社に、才子で勤めているんです。

その何ですととき、会社の重役の放蕩息子どらむすこが、ダイヤの指輪で、春の歌留多かるたに、ニチャリと、お稲ちゃんの手をおさ圧えて、おお可い厭や

だ。」

と払う真似して、

「それで、落第、もう沢山。」

「どうだか。」

「ほんとうですとも。それからそのニチャリが、」

「右のな、」

と春狐は、ああと歎息する。

「ええ、ぞつこんとなつて、お稲ちゃんをたつてと云うの、これにはあによめ嫂が一はながけに乗ったでしょう。」

「極きまりでいやあがる。」

「大分、お芝居になつて来たわね。」

「余計な事を言わないで……それから、」

「兄さんの才子も、やっぱりその気だもんですからね、いよいよ  
 という談話の時、きつぱり兄さんから断つてしまつたんですつて  
 はなし

——無い御縁とおあきらめ下さい、か何かでさ。」

「その法学士の方をだな、——無い御縁が凄じいや、てめえが勝  
 手に人の縁を、頤あごにしゃぼん玉の泡沫あぶくを塗つて、鼻の下を伸ばし  
 ながら横撫めけでに粧めけやあがる西洋剃かみそり 刀で切つたんじやないか。」

「ねえ……鬱ふさいでいましたとき、お稲ちゃんは、初心うぶだし、世間  
 見ずだから、口へ出しては何にも言わなかつたそうだけれど……  
 段々、御飯が少なくなつてね、好きなすきものもちつとも食べない。」

その癖、身じまいをする事つたら、髪も朝に夕に撫でつけて、

鬢びんの毛一筋こぼしていた事はない。肌着も毎日のように取替えて、  
 欠かさずに湯に入つて、綺麗にお化粧をして、寝る時はきつと寝ね  
おしろい白粧をしたんですつて。

しらは皓齒へにに紅べによ、凄すごいようじやない事、夜が更けた、色いろつや艶は。

そして二三度見つかりましたとき。起返つて、帯をお太鼓にき  
 ちんとメ《し》めるのを——お稲や、何をおしだつて、叔母さん  
 が咎とがめた時、——私はお母つかさんの許とこへ行くの——  
 そう云つてね、枕まくらもと許へちやんと坐つて、ぱつちり目を開け  
 て天井を見ているから、起きてるのかと思うと、現うつで正体がない  
 んですとき。

思おも詰いめたものだわねえ。」

## 十八

「まだね。危いつてないの。聞いても、ひやひやするのはね、夜中に密そつと箆筒たんすの抽斗ひきだしを開けたんですよ。」

「法学士の見合いの写真？……」

「いいえ、そんなら可いいけれど、短刀を密そつと持ったの、お母さんの守護まもり刀がだそうですよ……そんな身だしなみのあつたお母さんの娘なんだから、お稲ちゃんの、あの、きりりとして……妙とし齡ころで可愛い中にも品の可よかつた事を御覧なさい。」

「余り言うのはよせ、何だか氣を受けて、それ、床の間の花が、」

「あれ、」

と見向く、と朱鷺色ときいろに白すかの透おとめつばきしの乙女椿おとめつばきがほつりと一輪。

熟じつと視みたが、狭い座敷で袖が届く、女房は、くの字に身を開いて、色のうつるよう掌てのひらに据うつむえて俯向うつむいた。

隙間もる冷い風。

「ああ、四辻がざわざわする、お葬式ともらいが行くんですよ。」

と前掛てすりの片膝、障子へ片手。

「二階の欄干てすりから見る奴やつがあるものか。見送るなら門かどへお出な。」

「止よみましょう、おもいの種だから……」

と胸を抱いて、

「この一輪は蔭ながら、お手向たむけになつたわね。」と、鼻紙そつへ密



と置くと、冷い風に淡い紅……女心はかくやらむ。

窓の障子に薄日が映した。

「じゃ死のうという短刀で怪我でもして、病院へ入ったのかい。」  
「いいえ、それはもう、家中で要害が嚴重よ。寝る時分には、切れものという切れものは、そっくり一つ所へ蔵つて、錠をおろして、兄さんがその鍵を握つて寝たんだったっていうんですもの。」

「ははあ、重役の忤に奉つて、手練りつく出世の蔓、お大事なものですからな。……会社でも鍵を預る男だろう。あの娘の兄と云えば、まだ若かろうに何の真似だい。」

「お稲ちゃんは、またそんなでいて、しくしく泣き暮らしてでも、お在だつたかと思うと、そうじゃないの……精々裁縫をするん

ですって。自分のものは、肌のものから、足袋まで、綺麗に片づけて、火熨斗ひのしを掛けて、ちやんと蔵しまつて、それなり手を通さないでも、ものの十日も経たつと、また出して見て洗い直すまでにして、頼まれたものは、兄さんの嬰あかんぼ児のおしめさえ折りめの着くほど洗濯してさ。」

「おやおや、兄の嬰あかんぼ児の洗濯かね。」

「あによめ嫂あによめというのが、ぞろりとして何にもしやしませんやね。またちよつとふめるんだわ。そりやお稲ちゃんそぼの傍そばへは寄附よつけもしませんけれども。それでもね、妹が美しいから負けないようにって、——りようけん了りようけん簡かんですかね、兄さんが容きりよう色しき望ぼうみで娶とつたつていうんですから……」

小児こどもは二人あるし、家うちは大勢だし、小体こていに暮くっていて、別に女中にようぢゆうつても居いないんですもの、お守もりから何なにから、皆みんな、お稲いなちゃんちゃんがしたんだわ。」

「ははあ、その児こだ……」

ともすると、——それが夕暮ゆぐが多おほかつた——嬰あかんぼ児おを背お負ぶつて、別べつにあやすでもなく、結むすいたての島田しまだで、夕化粧ゆぐけいざうしたのが、顔かほをまつすぐに、清すずしい目めを睜みはつて、蝙蝠こうもりも柳やなぎも無なしに、何なにを見るともなく、熟じつと暮くれかかると向むこうがわ側がわの屋根やねを視ながめて、其家そこの門かど口ぐちにイいたずんだ姿すがたを、松崎まつざきは両三度りやうさんど、通とほりがかりに見みた事ことがある。

面影おもかげは、その時の見覚みさえで。

出窓でらの硝子がらす越こしに、娘むすめの方が往ゆきかえりの節ふしなどは、一体わきめ傍目わきめも

触ふらないで、竹をこぼるる露のごとく、すいすいと歩ある行く振ふり、打水つまにも棲つまのなずまぬ、はで姿、と思うばかりで、それはよくは目に留まらなかつた。

が、思い当る……葬とむらい式の出たあとでも、お稲はその身の亡なきが骸らの、白ひつぎいゆ樞さまで行く状を、あかどの、門かどに一人立たつて、さうつとりも恍うつとり惚とと見送みおくつていらしかつた。

## 十九

女房かたりは語かたり続つけた――

「お稲ちゃんが、そんなに美美しく身まわりの始はじ末まつをしたのも、

あとで人に見られて恥かしくないようにたしな寝んでいたんだわね——  
 そして隙さえあれば、直ぐに死ぬ気で居たんでしよう、寝しなに  
 お化粧をするのなんか。

ですから、病院へ入ったあとで、針箱の抽斗ひきだしにも、たとうがみ畳紙  
 の中にも、皺しわになった千代紙一枚もなく……油染あぶらじみた手柄ひとか一  
 掛けもなかったんですって。綺麗きれいにしておいたんだわ……友達か

ら来た手紙なんか、中には焼いたのもあるんですって、……心掛  
 けたじゃありませんか。惜おしまれる娘こは違うわね。

ぐつと取詰とりつめて、気が違った日は、晩方、髪結かみゆいさんが来て、  
 鏡台に向つていた時ですって。夏の事でね、庭あじさいに紫陽花あじさいが咲いて  
 いたせいかな、知らないけれど、その姿見あおの蒼あおさつたら、月もささ

なかったって云うんですがね。——そして、お稲ちゃんのその時の顔ぐらい、色の白いつて事は覚えないうんですとさ——

髪結さんが、隣家の女房へ談話なんです。  
となり かみさん はなし

同一のが廻りますからね。  
おなじ

隣家と、お稲ちゃん許と、同一のは、そりや可いけれど、まあ、

飛んでもない事……その法学士さんの家が、一つ髪結さんだつた  
うち  
んでしよう。だもんだから、つい、その頃、法学士さんに、余所  
よそ  
からお嫁さんが来て、……箱根へ新婚旅行をして帰った日に頼ま  
れて行って、初結いをしたつて事を……可ござんすか……お稲ち  
よ  
やんの島田を結いながら、髪結さんが話したんです。」

「ああ、悪い。」

と春狐は聞きながら、眉を顰めた。

同じように、打顰んで、蘭菊は、つげの櫛で鬢の毛を、ぐいと撫でた。

「……気を附けないと……何でも髪結さんが、得意先の女の髪を  
 一条ずつ取って来て、内証で人のと人のと結び合わせて蔵  
 ておいて御覧なさい。」

世間は直ぐに戦争よりは余計乱れると、私、思うんですよ。

お稲さんは黙って俯向いていたんです。左挿しに、毛筋を  
 通して銀の平打を挿込んだ時、先が突刺りやしないかと思っ  
 た。はつと髪結さんが抜戻した発奮で、飛石へカチリと落ちまし  
 た。……

——口惜しい——とお稻ちゃんが言ったんですって。根揃え我慢で緊めたばかりの元結が、プツツリ切れ、背中へ音がして颯と乱れたから、髪結さんは尻餅をつきましたとさ。

でも、髪結さんは、あの娘の髪の毛の事ばかり言って惜がつてるそ  
うですよ。あんな、美しい、柔軟な、艶の可い髪は見た事がな  
いってね、——死骸を病院から引取る時も、こう横に抱いて、看  
護婦が二人で担架へ移そうとすると、背中から、ずツとかかつて、  
裾よりか長うござんしたって……ほんとうに丈にも余るとい  
うんだわね。」

「ああ……聞いても惜い……何のために、髪までそんなに美しく  
世の中へ生れて来たんだ。」



春狐は思わず、詰るがごとく急込んで火鉢を敲いた。

「ねえ、私にだって分りませんわ。」

「で、どうしたんだい。」

「お稲ちゃんは、髪を結った、その時きり、夢中なの。別に駈出すの、手が掛るのって事はなかつたんだそうですけれど、たださえ細った食が、もうまるつきり通りますまい。」

賺しても、叱つても。

しようがないから、病院へ入れたんです。お医者さんも初から首をお傾げだったそうですよ。

まあね。それでも出来るだけ手当をしたにはしたそうだけれど、やっぱり、……ねえ……おとむらいになってしまつて——」

と薄りうつつした目のうちが、颯さつとさめると、ほろりとする。

## 二十

春狐は肩そびやを聳そびかした。

「なつたんじやない……葬式ともらいにされたんだ。殺されたんだよ。だから言わない事じやない、言語道断だ、不埒ふらちだよ。妹を餌えさに、鱒じょうが滝登りをしようなんて。」

「ええ、そうよ……ですからね、兄あにつて人もお稲ちゃんいなが病院へ入いつて、もう不可いけないっていつ時分ときから、酷ひどく何かをあ気にしてさ。嬰あかんぼ児ごが先に死ぬし、それに、この葬式ともらいの中だ、というのあに、嫂よめ。

だわね、御自慢の細君が、またどつと病気で寝ているもんだから、ああ稲がとりに来たとりに来たつて、蔭ではそう云つていますとさ。」

「待つていた、そうだろう。その何だ、ハイカラな叔母なんぞを血祭りに、家中塵みなごろし殺ころしに願ねがいたい。ついでにお父さんの中気だけ治してな。」と妙に笑つた。

「まあ、」

と目を睜みはつて、

「串じょうだん戯だんじゃないわ、人の気も知らないで。」

「無論、串戯ではないがね、女言濫みだりに信まずべからず、半分は嘘だろう。」

「いいえ！」

「まあさ、お前の前だがね、隣の女房かみさんというのが、また、とかく  
 おおげさ  
 大袈裟なんですからな。」

「勝手になさいよ、人に散々饒舌しゃべらしといて、嘘じゃないわ。ね  
 え、お稲ちゃん、女は女同士だわね。」

と乙女椿ほおずに頬摺りして、鼻紙に据えて立つ……

実はそれさえ身に染みた。

床の間にも残ったが、と見ると、苔つぼみの堅いのと、幽かすかに開いた二  
 輪のみ。

「ちよつと、お待ち。」

「何なにあにな」と襖ふすまに手を掛ける。

「でも、少し気になるよ、肝心、こが焦れ死しじにをされた、法学士の方は、別に聞いた沙汰なしかい。」

「先方さきでもね、お稲ちゃんはその容体だつてのを聞いて、それはそれは気の毒がつてね——法学士さんというのが、その若い奥さんに、真になつて言つたんだつて——お前は二度目だ。後妻だと思つてくれ。お稲さんとは、たしか確に結婚したつもりだつて——」

春狐はふと黙つてそれには答えず……

「ああ、その椿は、成りたけ川へ。」

「流しましょうね、ちよつと拝んで、」

と二階を下りる、……その一輪の朱鷺ときいろ色さえ、消えた娘の面影に立った。

が、幻ならず、最も目に刻んで忘れないのは、あの、夕暮を、  
門かどに立つて、恍惚うっとり空を視ながめた、およそ宇宙の極まる所は、艶や  
かに且つ黒きその一点の秘密であろうと思う、お稲の双の瞳であ  
った。

同じその瞳である。同じその面影である。……

——お稲です——

と云つて、振向いた時の、舞台の顔は、あまつさえ、凝なごえたに  
せよ、向つて姿見の真蒼まっさおなど云う行燈あんどんがあるうではないか。  
美しい女ひとは屹きと紳士を振向いた。

「貴方あなた。」

若い紳士は、杖ステッキを小脇こわきに、細い筒袴ずぼんで、伸掛のしかかつて覗のぞいて、

「稲荷だろう、おい、狐が化けた所なんだろう。」と中折なかおれひさしの廂おしで押つけるように言った。

羽織に、シヨオルを前結び。またそれが、人形に着せたように、しつくりと姿に合つて、真向きまむきに直つた顔を見よ。

「いいえ、私はお稲です。」

紳士は、射られたように、縁台さかへ退つた。

美しい女の棲つまは、真菰まこもがくれの花菖蒲はなあやめ、で、すらりと筵むしろの端かかに掛つた……

「ああ、お稲さん。」

と、あたかもその人のように呼びかけて、

「そう。そして、どうするの。」

お稲は黙って顔を見上げた。

小さなその姿は、ちようど、美しい女ひとが、脱いだ羽織をしなやかに、肱ひじに掛けた位置に、なよなよとして見える。

「よ止め！品子さん。」

「可いいわ。」

「見つともないよ。」

「私は構わないの。」

二十一

「ねえ、お稲さん、どうするの。」



とまた優しく聞いた。

「どうするって、何、小母さん。」

役者は、ために羽織を脱いだ御鼻<sup>ごひいき</sup>屑<sup>くず</sup>に対して、舞台ながらもおとなしい。

「あのね、この芝居はどういう脚色<sup>しやくみ</sup>なの、それが聞きたいの。」

「小母さん見ていらつしやい。」

と云った。

その間<sup>うち</sup>も、縁台に掛けたり、立ったり、若い紳士は気が気ではなさそうであった。

「おい、もう帰ろうよ、暗くなつた。」

雲にも、人にも、松崎は胸<sup>とどろ</sup>が轟く。

「待つて下さい。」

と見返りもしないで、

「見ますよ、見るけれどもね、ちよつと聞かして下さいな。ね、いい児こだから。」

「だって、言つたつて、芝居だつて、同一おなじなんですもの、見ていらつしやい。」

「急ぐから、先へ聞きたいの、ええ、不可いけない。」  
お稲は黙かぶりつて頭ふを掉ふる。

「まあ、強情だわねえ。」

「強情ではござりませぬ。」

と思いがけず幕の中から、皺しわがれた声を掛けた。美しい女ひとは瞳

を注いだ、松崎は衝と踏台を離れて立った。——その声は見越入道が絶句した時、——紅蓮ぐれん大紅蓮とつけて教えた、目に見えぬものと同じおなじであつた。

「役者は役をしますのじゃ。何も知りませぬ。貴女あなたがお急ぎであらばの、衣裳いしやうをお返し申すが可い。」

と半ば舞台に指揮さしずをする。

「いいえ、羽織なんか、どうでも可いの、ただ私、気になるんです。役者が知らないなら、誰でも構いません。差支えなかつたら聞かして下さい。一体ここはどこなんです。」

「六道の辻の小屋がけ芝居じゃ。」

と幕が動くように向うで言った。

松崎は、思わず紳士と目を見合つた。小児こどもなどは眼中にない、

男は二人のみだったから。

美しい女ひとは、かえつて恐れげもなくこう言つた。

「ああ、分りました、そしてお前さんは？」

「いろいろの魂を瓶かめに入れて持つてゐる狂言方じゃ。たつて望みならば聞かせようかの。」

「ええ、どうぞ。」

と少々わかわか々しいのが、あわれに聞えた。

「そこへ……髪結かみゆいが一人出るわいの。」

松崎は骨の硬くなるのを知つたのである。

「それが、そのお稲の髪を結うわいの。髪結の口からの、若い男

と、美しい女と、祝言して仲の睦じい話をするのじや。

その男というのはの、聞かつしやれ、お稲の恋じやわいの、命じやわいの。

もうもう今までとともな、腹の汚きたない、慾よくに眼まなこの眩くらんだ、兄御のために妨げられて、双方で思い思うた、繋がる縁が繋がれぬ、その切なさで、あわれや、かぼそい、白い女が、紅蓮ぐれん、大紅蓮、：

…

ああ、可厭いやな。

「阿鼻焦熱あびしょうねつの苦惱くるしみから、手足がはり、肉みを切きりこまざいた血の池の中で、悶もだえ苦くるんで、半ば活いき、半ば死んで、生きもやらねば死しにも遣やらず、死しにも遣やらねば生きも遣やらず、呻うめき悩なんでいた所

じゃ。

また方に一つもと、果敢はかない、細い、蓮はすの糸を頼んだ縁は、その話で、鼠きばの牙きばにフツツリと食切られたが、……

ドンと落ちた穴の底は、狂氣きちがいの病院いり入じゃ。この段替ればいの、狂乱しよさの所作しよさじゃぞや。」

と言う。風が添ったか、紙の幕が、煽あおつ——煽つ。お稲は言ことばにつれて、すべて科しぐさを思しったか、振ふりが手にうっかり乗のって、恍うっとり惚とと目を睜みはった。……

「どうするの、それから。」

細い、とおが透る、力ある音調である。美しい女ひとのその声に、この折から、背後うしろのみ見返られて、雲のひだ染にじみに蔽おほいかかる、棧さじき敷裏うらとも思う町を、影法師のごとくようやく人脚の繁くなるのに気を取られていた、松崎は、また目を舞台に引附けられた。

舞台を見返す瞬間、むこうから、先刻さつきの編笠を被かぶつた鴉からすのような新粉細工が、ふと身を起して、うそうそと出て来るのを認めめた。且つそれが、古綿のようにむくむくと、雲の白さが一ひとかたまり団残つて、底かすかに幽あおぞらに蒼空の見える……遥はるかに遠い所から、たとえば、ものの一里も離れた前途さきから、黒雲を背後うしろに曳ひいて襲おそい来ることく見て取られた。

それ、もうそこに、編笠を深く、舞台を覗く。のぞ

いつの間にか帰つて来て、三人に床几を貸した古女房も交つて立つ。

彼処かしこに置捨てた屋台車が、主ぬしを追うて自ら軋きしるかど、響ひびきが地を畝うねつて、轟ごうごう々と雷らいの音。絵の藤も風に颯さつと黒い。その幕の彼方かなたから、紅蓮、大紅蓮のその声、舌も赤う、ひらめくと覚えて、めらめらと饒舌しゃべる。……

「まだ後が聞きとうござりますか。お稲は狂死くるいじにに死ぬるのじや。や、じゃが、家眷親属うからやからの余所よそで見る眼まなこには、鼻筋の透つた、柳の眉毛、目を糸のように、睫毛まつげを黒う塞ふさいで、の、長煩ながわづららしい死ぬ身みには塵ちりも据すわらず、色が抜けるほど白いばかり。さまで瘦やせ



もせず、苦患くげんも無しに、家眷息絶ゆるとは見たれども、の、心の裡うちの苦痛くるしみはよな、人の知らぬ苦痛はよな。その段を芝居で見せるのじゃ。」

「そして、後は、」

と美しい女ひとは、白い両手で、確しかと紫の襟おきを圧おさえた。

「死骸しがいになつての、空うつせみ蟬せみの藻脱はだけた膚はだは、人間の手を離はなれて牛頭馬頭ごごの腕うでに上下じやうげから掴つかまれる。や、そこを見せたい。その娘この仮髪かみぢや、お稲の髪には念ねんを入いれた。……島田しまだが乱みだれて、糸いとも切きもかからぬ膚くを黒く輝きらく、吾あが天女あまめの後光ごうのように包かむを見さい。末すえは踵かかとに余あつて曳ひくぞの。

鼓草たんぼぼの花の散ちるように、娘むすめの身体からだは幻まぼろしに消きえても、その黒髪くろかみ

は、金輪こんりん、奈落、長く深く残つて朽ちぬ。百年ももとせ、千歳ちとせ、失せうず、枯れず、次第に伸びて艶を増す。その髪千筋一筋ずつ、獣けものが食えば野の草から、鳥が啄はめば峰の花から、同じお稲の、同じ姿かたちとなつて、一人ずつ世に生れて、また同一年おなじ、同一月日おなじに、親兄弟、家眷親属、己おのが身勝手な利慾りよくのために、恋をせかれ、情なさけを破られ、縁を断きられて、同一思おなじいで、狂くるい死しするわいの。あの、厄年の十九を見され、五人、三人一いつとき時に亡うせるじやろうがの。死ねば思いが黒髪に残つてその一筋がまた同じ女と生れる、生きかわるわいの。死にかわるわいの。

その誰もが皆揃うて、親兄弟を恨む、家眷親属を恨む、人を恨む、世を恨うらむ、人間五常の道乱れて、黒白あやめも分かず、日おほを蔽おほい、

月を塗る……魔道の呪詛のろいじゃ、何と！ 魔の呪詛を見せますのじや、そこをよう見さつしやるが可いい。

お稲の髪の毛の、乱れて摩なびく処をのう。」

「死んだお稲さんの髪が乱れて……」

と美しい女ひとは、衝つと鬢びんに手を遣つたが、ほつれ毛よりも指ゆらが揺いで、

「そして、それからええ？」

と屹きつと言う

「此方こなた、親があらば叱らさりよう。よう、それから聞きたがるの、根問ねどいをするのは、愛あい嬌きようが無うてようないぞ。女子おなごは分けて、うら問はどいい葉問はどいをせぬものじや。」

雲の暗さが増すと、あたりに黒く艶が映さす。

その中に、美しい女ひとは、声も白いまで際立って、

「いいえ、聞きたい。」

## 二十三

「たつて聞きたくばの、こうさしやれ。」

幕の蔭で、間まを置いて、落着いて、

「お稲の芝居は死骸の黒髪くろかみの長いまでじゃ。ここでは知らぬによつて、後は去いんで、二度添ぞいどのに聞かきつしやれ、二度添ぞいいの女子おなごに聞かきつしやれ。」

「二度添とは？ 何です、二度添とは。」

扱帯しづきを手繰るように繰返して問返した。

「か、知らぬか、のう。二度添とは、二度目の妻の事じゃ。男  
に取替えられた玩弄おもちゃの女子おなごじゃ。古い手に摘まれた、新しい花  
の事いの。後妻うわなりじゃ、後妻ごさいと申しますものじゃわいのう。」

ト一度引ひっかかったように見えたが、ちらりと筵むしろの端を、雲の影  
に踏んで、美しい女ひとの雪なす足袋は、友染すぢ淒く舞台に乗った。

目を明あきらかに凝じっと視みて、

「その後妻とは、二度添とは誰れ、そこに居る人。」と肩を斜め、  
手を、錆さびたが楯たてのごとく、行燈あんどんに確しかと置く。

「おおお、誰や知らぬ、その二度添というのは、……お稲が

望のぞみが遂げなんだ、縁の切れた男に、後で枕添まくらぞえとなつた女子おなごの事い  
 の。……娑婆しゃばはめでたや、虫の可いい、その男はの、我が手で水を  
 向けて、娘の心を誘うておいて、弓でも矢でも貫こう心はなく、  
 先方さきの兄者に、ただ断り言われただけで指を銜くわえて退すつたいの、  
 その上うへにの。

我われ勝手がや。娘むすめがこがれ死しをしたと聞けば、おのれが顔をか  
 みで見ると、自惚うぬぼれての。何と、早や懐ふところ中に抱いた気で、お  
 稲はその身の前妻まへつまじゃ。——

との、まだお稲が死なぬ前に、ちやツと祝言した花嫁御寮はなよめごしやうに向  
 うての、——お主ぬしは後妻ごつまじゃ、二度目ぢやと思つておくれい、  
 ——との。何と虫が可よかろうが。その芋虫うづもにまた早や、台うてなも蕊しべも嘗な

められる、二度添どのもあるわいの。」

と言うかと思う、声の下で、

「ほほほほ」

と口紅がこぼれたように、散って舞うよと花やかに笑った。

ああ、<sup>はだ</sup>膚が透く、心が映る、美しい女<sup>ひと</sup>の身の震う影<sup>くま</sup>が隈なく<sup>きぬ</sup>衣の柳条<sup>しま</sup>に<sup>から</sup>搦んで揺れた。

「帰ろう、品子、何をしとる。」

紳士はずかずかと寄つて、

「詰<sup>つま</sup>らん、さあ、帰るんです、帰るんだ。」

とせり着くように云つたが、身動きもしないのを見て、堪<sup>たま</sup>りかねた体<sup>てい</sup>で、ぐいと美しい女<sup>ひと</sup>の肩を取った。

「帰らんですか、おい、帰らんのか。」

その手は衝と袖で払われた。

「あなた貴方は何です。女の身体からだに、勝手に手を触つて可いんですか。

他人の癖に、……」

「何だ、他人とは。」

むき憤気になると、……

「舞台へ、靴で、誰、お前は。」

さつき先刻から、ただ柳が枝垂しだれたように行燈に凭もたれていた、黒紋くろもん

つき着のその雪女が、りんとなつて、両手で紳士の胸を圧おした。

トはつとした体ていで、よろよろと退しやつたが、腰も据らず、ひよろついて来てすが継つるように寄つたと思うと、松崎は、不意にギクと手



首を持たれた。

「貴方あなたを、伴侶つれ、伴侶と思います。あ、あ、あの、楽屋の中が、

探険、……」

紳士は探険と言った。

「た、た、探険したい。手を貸して下さい。御、御助力が願いたい。」

「それはよくない。不可いけません。見物は、みだりに芝居の楽屋へ入るものではないんです。」

「そ、そんなら、妻さいを——人の見る前、夫が力づくでは見つともない。貴方、連出して下さい、引張ひっぱりだ出して下さい、願います。

僕を、他人だなんて僕を、……妻は発狂しました。」

## 二十四

「いいえ、御心配には及びません。」

松崎は先んじられた……そして美しい女は、淵の測り知るべからざる水底の深き瞳を、鋭く紳士の面に流して

「私は確です。発狂するなら貴方がなさい、御令妹のお稲さんのために。」

と、爽かに言つた。

「私とは、他人なんです。」

「他人、何だ、何だ。」

と喘ぐ、

「ですが、私に考えがあつて、ちよつと知己ちかづきになつていたばかりなんです。」

美しい女ひとは、そんなものは、と打棄うっちゃる風情で、屹きとまた幕に向つて立直つた。

「そこに居る人……お前さんは不思議に、よく何か知つておいでだね、地獄、魔界の事まで御存じだね。豪えらいのね。でも悪魔、変へ化んげばかりではない、人間にも神通じんずうがあります。私が問うたら、お前さんは、去いつて聞けと言いましたね。

私は即座に、その二度添ぞい、そのうわなり、その後妻に、今ここで聞きました。……

お稲さんが亡くなってから、あとのその後妻の芝居を、お前さんに聞かせましようか。聞かせましようか。それともお前さんは御存じかい。」

幕の内で、

「おぼろげ朧氣じゃ、めいど冥土の霧で朧氣じゃ。はつきりした事を聞きたいのう。」

「ええ、聞かしてあげましょう。——男に取替えられた玩おもちゃ弄は、古い手に摘まれた新しい花は、はじめは何にも知らなかったんです。清い、美しい、朝露に、あさひ旭に向って咲いたのだと人なみに思っていました。ですが、蝶が来て、一所に遊ぶ間もなかったんです。

お稲さんの事を聞かされました。玩弄おもちゃは取替えられたんです、花は古い手に摘つまれたんです……男は、潔い白い花を、後妻になれと言いました。

贅ぜいたく沢です、生意気です、行過ぎていきます。思つた恋をし遂げないで、引込んだら断念めれば可いい、そのために恋人が、そうまですして生命いのちを棄てたと思つたら、自分も死ねば可いいです。死ななければ、死んだ気になつて、お念仏を唱えていれば可いいです。

力が、男に足りないで、殺させた女を前妻だ、と一人極ぎめにし  
て、その上に、新妻にいづまを後妻になれ、後妻にする、後妻の気でお  
れ、といけ洒しやあしやあ亜々々として、髪を光らしながら、鱸どじょうひげ髭の生え

た口で言うのは何事でしょうね。」

「いよいよ発狂だ、人の前で見つともない。」

紳士は肩で息をした、その手は松崎にすが縋っている。……

「ええ、人の前で、見つともないと云つて、ここには幾いくたり多居ます。指を折つて数えるほどもない。夫が私を後妻にしたのは、大勢の前、世間の前、何千人、何万人の前だか知れませんか。

夫も夫、お稲さんの恋を破つた。そこにおいでことばの他人も他人、皆みんな女の仇かたきです。

幕の中の人、お聞きなさい。

二度添にされた後妻はね……それから夫の言ことばに、わざと喜んで従いました。

涙を流して同情して、いつそ、後妻と云うんなら、お稲さんの妹分になつて、お稲さんにあやかりましょう。そのうまれ代わりになりましょう、と云つて、表向きつてを求めて、お稲さんの実家に行つて、そして私を——その後妻を——兄さんの妹分にして下さい、と言つたんです。

そこに居る他人は、涙を流して喜びました。もつとも、そこに居るようなハイカラさんは、わか少い女が、兄さん、とさえ云つてやれば、何でも彼かでも涙を流すに極きまつています。

私は精々せつせと出入りではいしました。先方さきからも毎日のように来るんです。そして兄さん、兄さんと、云ううちには、きつと袖を引くに極きまつています。しかも奥さんは永々の病氣の処、私はそれが

望みでした。」

いなびかり電が、南辻橋、北の辻橋、菊川橋、しゅもく撞木橋、川を射て、橋に輝くか、と衝つと町を徹とおつた。

## 二十五

「その望みが叶かなつたんです。

そして、今日も、夫婦のような顔をして、二人づれで、お稲さんの墓参りに来たんです——夫は、私がこうするのを、お稲さんの霊たましい魂が乗りうつつたんだと云つて、無性に喜んでるんです。殺した妹の墓の土もまだ乾かないのに、私と一所に、墓参りを



して、御覧なさい、裁下ろしの洋服の襟に、乙女椿の花を挿して、お稲は、こういう娘だったと、平気で言います。

その気ですからね。」

紳士の身体は靴を刻んで、揺上がるようだったが、ト松崎が留めたにもかかわらず、かつと握拳で耳を圧えて、横なぐれに倒れそうになって、たちまち射るがごとく町を飛んだ。その状は、人の見る目に可笑くあるまい、礫のごとき大粒の雨。

雨の音で、寂寞する、と雲にむせるように息が詰った。

「幕の内の人、」

美しい女は、吐息して、更めて呼掛けて、

「お前さんが言った、その二度添いの談話は分ったんですか。」

「それから、」

と雨に濡れたような声して言う。

「これが知れたら、男二人はどうなります。その親兄弟は？ その家族はどうなると思います。それが幕なのです。」

「さて、その後はどうなるのじゃ。」

「あら、……」

もどかしや。

「お前さんも、根問ねどいをするのね。それで可いではありませんか。」

「いや、可ようないわいの、まだ肝心な事が残ったぞ。」

「肝心な事って何です。」

「はて、此方こなたも、」

雨に、つと口を寄せた氣勢けはいで、

「知れた事じゃ……肝心のその二度添ぞどのはどうなるいの。」  
 聞くにも堪えじ、と美しい女の眦ひとまなじりあがが上った。

「ええ、廻りくどい！ 私ですよ。」

と激さました状で、衝つと行燈あんどんを離れて、横ざまに幕の出入口に寄  
 った。流るるような舞台の姿は、斜めに電いなびかり光さつに颯さつと送られた。

……

「分っているがの。」

と鷹揚おうように言つて、

「さてじゃ、此方こなたの身は果はてはどうなるのじゃ。」

「……………」

ふと黙つて、美しい女は、行燈に、しよんぼりと残つたお稲の姿にその眦まなじりを返しながら、

「お前さんの方の芝居は？ この女はどうなる幕です。」

「おいの、……や、紛れて声を掛けなんだじゃで、お稲は殊勝けなげ気に舞台じやつた。——雨に濡りように……折角の御見物じゃ、幕切れだけ、ものを見しような。」

と言うかと思うと、唐突だしぬけにどろどろと太鼓が鳴つた。音を絢な交えまぜに波打つ雷鳴らいめいる。

猫が一足と鼪いたちが出た。

ト無慙むざんや、行燈の前に、仰向けあおむに、一個ひとつが頭つむりを、一個ひとつが白脛しらはぎを取つて、宙に釣ると、縮わがねの緩んだ扱帯しごきが抜けて、紅裏もみうちが肩

をすべにつた……雪女は細りほつそとあからさまになったと思うと、すらりと落した、肩なぞえの手を枕に、がつくりと頸うなじが下つて、目を眠つた。その面影に颯さつと影、黒髪が丈たけに乱れて、舞台より長く敷いたのを、兇悪異変な面つら二つ、ただ面めんのごとく行燈より高い所を、ずるずると引いて、美しい女ひとの前を通る。

幕に、それが消える時、風が擲なげうつがごとく、虚空から、——雨交りに、電光の青き中を、朱鷺色ときいろが八重に縫う乙女椿の花一輪。はたと幕に当って崩れもせず……お稲の玉なす胸に留まって、たちまち隠れた。

美しい女ひとむしろは筵つまだに爪立つまだつて身悶みもだえしつ、

「お稲さんは、お稲さんは、これからどうなるんです、どうなる

んです。」

「むむ、くどいの、あとは魔界のものじゃ。雪女となつての、三つ目入道、大入道の、酌とぎなど伽ときなとしようぞいの。わはは、」

と笑つた。

美しい女ひとは、額を当てて、幕を掴つかんで、

「生意気な事をお言いでない。幕の中の人、悪魔、私も女だよ、十九だよ……お稲さんと同じ死骸になるんだけれど、誰が、誰が、酌なんか、……可哀相にお稲さんを——女はね、女はね、そんな弱いものじゃない。私を御覧。」

はたた、はたた神。

南無なむさんぼう三宝、電光に幕あるのみ。

「あれえ。」と聞えた。

瞬間、松崎は猶ためら予つたが、棄ておかれぬのは、続いて、編笠した鳥と古女房が、衝つと幕を揚げて追込んだ事である。

手を掛けると、触るものなく、篠しのつく雨の簾すだれが落ちた。

と見ると、声のしたものは何も見えない。三つ目入道、狐、狸、猫も鼬もごちやごちやと小さく固まっていたが、松崎の殺進に、気を打たれたか、ばらばらと、奥へ遁にげる。と果はてしもなく野原のごとく広い中に、塚を崩した空洞うつつろと思う、穴がほかほかとおおきくほんで蜂の巣を拵ひげたような、その穴の中へ、すぽん、と一個ひとつずつ飛込んで、ト貝かいだこ鮓こと云うものめく……頭だけ出して、ケラケラと笑つて失うせた。

何等の魔性ぞ。這奴等が群り居た、土間の雨に、引撈られた衣きぬの綾あやを、驚破すわや、蹂躪ふみにじられた美しい女ひとかと見ると、帯ばかり、扱帯しごきばかり、花片はなびらばかり、葉ばかりぞ乱れたる。

途端に海のような、真昼を見た。

広場は荒廃して日久しき染物屋らしい。縦横たてよこに並んだのは、いずれも絵の具の大瓶おおがめである。

あわれ、その、せめて紫の瓶なれかし。鉄のひびわれたごとき、遠くの壁際の瓶の穴に、美しい女ひとの姿があつた。頭つむりを編笠が抱えた、手も胸も、面影も、しろしろと、あの、舞台のお稻そのままに見えたが、ただ既に空洞うつほへ入つて、底から足を曳ひくものがあるう、美しい女ひとは、半身を上うへに曲げて、腰のあたりは隠れたのであ



る。

雪のような胸には、同じ朱鷺色ときいろの椿がある。

叫んで、走りかかると、瓶しきりの区劃つまずに躓いて倒れた手に、はつと

留南奇とめきして、ひやひやと、氷のごとく触ったのは、まさしく面影

を、垂れた腕かいなにのせながら土間を敷いて、長くそこまで靡なびくのを

認めた、美しい女ひとの黒髪ひとの末なのであつた。

この黒髪は二筋三筋指にかかつて手に残つた。

海に沈んだか、と目に何も見えぬ。

四ツの壁は、流る電いなびかりと輝く雨である。とどろとどろと鳴るか

みは、大灘おおなだの波うなの唸りである。

「おでんや——おでん。」

戸外おもてを行く、しかも女の声。

我はに返かへつて、這はうように、空屋の木戸を出ると、雨上りの星が  
晃きら々きら。

後で伝え聞くと、同一時おなじ、同一所おなじから、その法学士の新夫人の、  
行方の知れなくなつたのは事実とか。……松崎は実は、うら少わかい  
娘の余り果敢はかなさに、亀井戸詣もうでの帰途かえるさ、その界隈かいわいに、名譽の巫い  
子ちこを尋ねて、そのくちよせを聞いたのであつた……靈きたの来きたつた状さま  
は秘密だから言うまい。魂たまの上あがの時、巫子くうは、空を探つて、何も  
ない所から、弦ゆんづるにかかつた三筋ばかりの、長い黒髪を、お稲の記か  
念たみぞとて授けたのを、とやせんとばかりで迷まよの巷ちまた。

黒髪は消えなかつた。

大正二（一九一三）年五月



# 青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成6」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年3月21日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第十五卷」岩波書店

1940（昭和15）年9月20日発行

※誤植箇所の確認には底本の親本を用いました。

入力：門田裕志

校正：高柳典子

2007年2月12日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 陽炎座

## 泉鏡花

2020年 7月13日 初版

### 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>